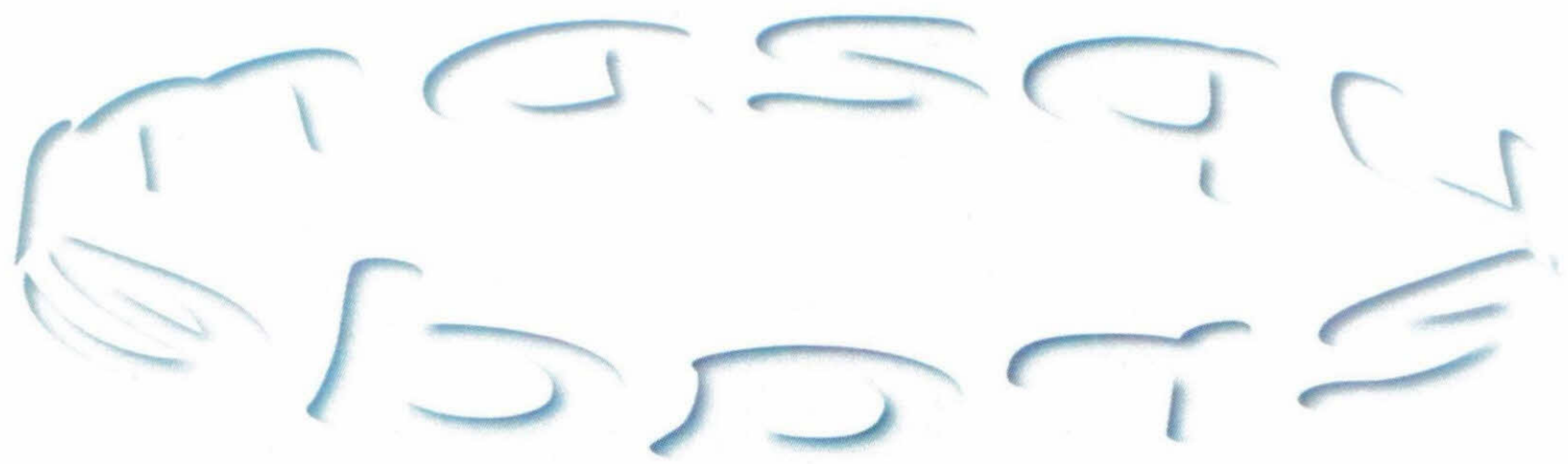




part eight

number five edited by dr. masato mugitani
限定100部の内の11/100

Black Art の研究

麦谷眞里

(まえがき)近年、韓国勢を始めとする若いマジシャンたちがステージやクローズ・アップでブラック・アートと呼ばれる手品の技術を多用するようになりました。その典型は、2012年の FISM でグランプリを取ったユー・ホー・ジンであり、2017年5月の AGT(America's Got Talent)で合格したウイル・ツアイです。ウイル・ツアイはカナダ系の台湾人ですが、ブラック・アートを特集したDVD も出しています(写真133)。



写真133

この DVD は2枚組で、79.95ドルです(約8500円)。ウイル・ツアイという人は、このほかにも商品を出していて、それらの解説も DVD でなされていますが、共通して言えることは非常に饒舌で、手品の演技や解説よりも彼が喋っている時間のほうがずっと長いのです。これは、手品の解説 DVD としては作り方が下手です。まず、模範演技、次いでやり方も含めてざっと解説して、それからそれに付随することを話せば、購入者も聞いてくれるのに、この人は、DVD の冒頭から滔々と持論を展開するのです。それは後から聞けば、なかなか大事なことも言っているのですが、最初に、理論とか、演出とか、素材の違いなどを述べられても、観ているほうの頭には入って来ません。これだけではなく、たとえば、AGT で彼が演じた“Rose Act”の DVD なども、ずっと喋っていて、核心に触れるまでの前置きが相当に長い時間かかります。それなのに、どういう理由からか、肝心のブラック・アートの造り方や演技の解説になったら、さっきまであんなに喋っていたのに今度は一切無言で、パントマイムで指差したり、動作で示したりするのです。その代わりに、説明が英語で画面の下の方に字幕で出ます。映画のシーンではなくて、ブラック・アートのギミックの造り方とかセットの仕方、そしてそれを使った手品の解説ですから、字幕を読んでいるより、むしろ画面の動きに集中したいのに、字幕を読まねばなりません。まさに、こういうときこそ、字幕ではなくてひとつひとつ喋って説明して、演技の要領などもポイントをコメントして欲しいと思いました。これは、ウイル・ツアイ本人の性格もあるでしょうが、販売しているディーラーである SansMinds 奇術用具店の誰かが助言すればいいのに、と思いました。

1. もととのブラック・アート

Whaley の辞典によれば、1885年6月に、ベルリンで演じられたステージが嚆矢とあります。次いで1886年12月には、ロンドンの Egyptian Hall において Bautier De Kolta が演じています。いずれもステージ・マジックで、黒の背景に黒いカバーをつけた人や物体を隠しておいて、それらを、黒のカバーを取り去ることによって忽然と出現させたり、あるいは逆に背景と同じ色の黒のカバーをすることによって消失させたりする現象です。以後、いろいろな形態やさまざまな手品でこの原理は応用されて、現代でも身近なものとしては、スクエア・サークルなどのプロダクションに使われる「秘密の黒い筒」などもブラック・アートの概念によるものです。(株)テンヨーの製品は、その名もズバリの「ブラック・アート」と付いています。したがって、広義の意味では、19世紀以来、ずっと手品の世界では使われて来た概念だったのです。

2. 最近のブラック・アート

最近のブラック・アートの応用は、19世紀に劇場で演じられたステージ上の大掛かりなものではなくて、ステージでもクローズ・アップでも、マジシャン周辺に起こる出現・消失を含む変化現象に使うものです。旧来のブラック・アートの背景と同じ色のカバーに加えて、インビジブル・スレッドやリール(電動リールも)を併用するので、原理の知らない人からは、まさに奇跡が起こったように見えます。文章で書くのは恐縮ですが、たとえば、ステージ上のマジシャンが、指に持っているカードに息を吹きかけると、小さな花びらになって床に落ちるなどの現象です。変化は一瞬で、観ている

と、本当にカードが花びらに変化したように思えます。カードが消えるのに怪しい動作が一切ないところがミソです。カードが1枚なら裏側がマジシャンの服(黒なら黒)と同色同質の素材になっていて、カードを裏向きにしてそのまま服に磁石で貼りつければ、観客からは消えたように見えます。文章で読むと、そんなことができるのか?とかそんなことで観客は驚くのか?と思われるかもしれませんが、できますし、観客を驚かせるには十分な技術です。

クローズ・アップで言えば、ブラック・アートを使ってトーン・アンド・レストーアード・カードを行なうとマジシャンの動きも綺麗で、復活したカードの改めもできますし、一度は演じてみたいと思うこと必至です。あるいは、Henry Evans なども、カードをマットの色に合わせて黒くしたブラック・アートの小品をレクチャーなどでは解説しています。

3. 考察

すでに紹介したウイル・ツアイのDVDにも数多くの応用手品が収載されています。もちろん素材の選び方や用具の造り方、セットの仕方、演技のやり方などもかなり懇切丁寧に説明されています。どれも見ていて面白く楽しめます。では、自分で演じるものはあるか?と問われると、これは残念ながらひとつもありません。理由はいろいろありますが、大きく分けて3つあります。

①ギミックや用具の製作が煩雑なこと。(Rose Act のように自分で造らなくてもよい市販のものもありますが、大きくて、とても持って歩けません)。

②同色のマットや服装などの演技の制限があること。

③リールやインビジブル・スレッドなどのセットが面倒ですぐには演じられないこと。

手品には、その手段や方法ではなく現象や効果がすべてであるという考えがあるのにはある程度は同意できます。ただ、私は古い世代のマジシャンなので、手品で驚かせるのなら何をやってもいいとは思いません。やっぱり「禁じ手」というのはあると思うのです。たとえば、2015年のFISMでメンタル・マジックのグランプリを取った Amelie と Thommy の "The Clairvoyants" は私も大好きですが、彼らの演技が無線や聴衆の中のサクラを使っていたものだとしたら、私は大いにがっかりし、また興奮めもします。厳密には一部に無線のようなものを使っているかもしれませんが、"The Clairvoyants"の演技はもっと複雑で複合的なものだと思います。

またオランダのマジシャン Tommy Wonder は、いまから約40年ほど前、まだ、Jose Bema と名乗っていたときにアメリカ合衆国の友人宅で初めて会いました。そのときギミックを使った妙なカード・マジックを見せられて、この人、変な人だな、と思った記憶があります。その後、あっという間に有名になりました。彼の全3巻からなるDVDをご覧になった方は、その中の "Nest of Boxes" という手品を覚えておられるでしょうか? 客の腕時計が消えて、最初からずっとテーブルの上に置いてあった箱の中の目覚まし時計の中から出現するという手品です。Tommy Wonder はもとより手練れで、カード・マジックもカップ・アンド・ボールも上手ですが、こういう道具物の手品も得意なのです。この "Nest of Boxes" は同じDVDで解説もなされていて、何と、テーブルの中を客の腕時計が移動して目覚まし時計の下から入るというメカニズムになっています。さらに驚くのは、これは別の人の手によって商品化されて売られていることです。ちなみに値段は3万ドル(約320万円)

で、世界中で10個だけの限定です。さすがにこの値段では完売できないのか、まだ売っています(写真134)。

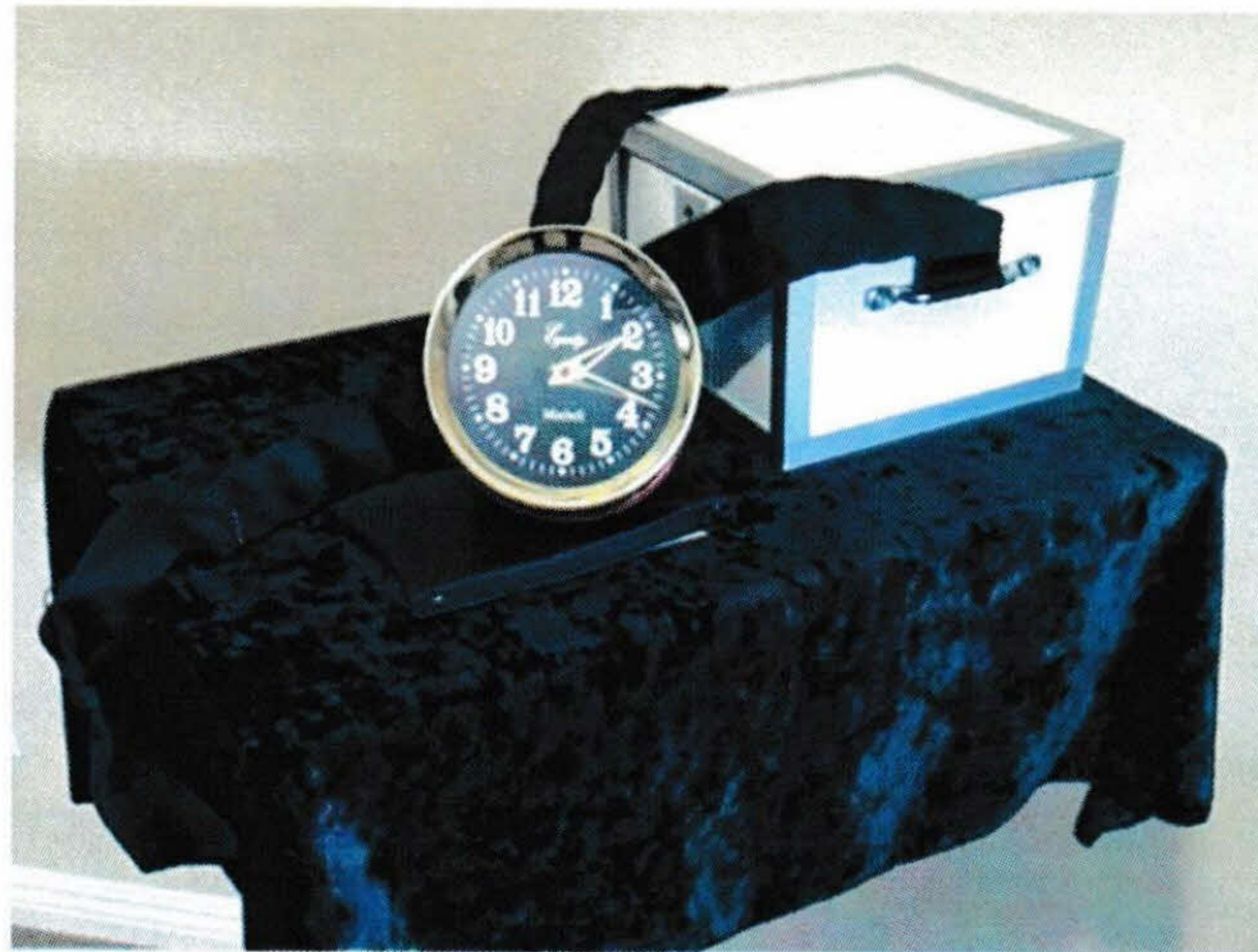


写真134

これは、DVD で実際の演技(観客がいます)を観ると、その素晴らしさがわかりますが、まさか、こんなメカニズムであるとはマニアにも想像がつかないと思います。実は、このタネ明かしというかメカニズムを含めた説明を同じ DVD で Tommy Wonder 自身が行なっているのですが、その MC というか聞き役を Max Maven が務めていて、この“Nest of Boxes”で客の腕時計がテーブルの下を移動するメカニズムの説明を聞きながら思わず苦笑するのです。すると、Tommy Wonder は、「マックス、笑うな!」と言います。このような受け答えが DVD の台本にあったとは思えませんから、Max Maven はメカニズムの説明を聞きながら思わず苦笑したのにちがいありません。私の勝手な想像ですが、Max Maven はメカニズムに感心してそのアイデアに敬意を払いながらも、これが手品か?と思ったのです。ご存じの通り、“Nest of Boxes”は、このような複雑なメカニズムを使わなくても、最初から観客の目の前にあった箱の中から借りた腕時計を出すことができます。マニアでない普通のお客さんからは、むしろ、四重、五重の箱の中から出て来たほうが不思議かもしれません。ただ、Tommy Wonder ですから、新しい演出でかつ新しい方法で彼らしい“Nest of Boxes”を造りたかったのだと思います。そのことは、この手品のタイトルを、“In the Alarm Clock”などとせず、“Nest of Boxes”という旧来からの手品の名前にしたことからも頷けます。

ずいぶん周り道をしましたが、いまの例で言うと、客の腕時計をテーブルの下でメカニズムで運ぶのは、いわば「禁じ手」です。ブラック・アートで言うと、黒いマットの上で、黒いカバーとスレッドでコインが出たり消えたりして行なうコイン・マトリックスは、コインの枚数の増減や移動も自由自在ですから、不思議さは一様ではありませんが、やはり「禁じ手」だと思うのです。

ブラック・アートのアイデアも概念も前述のごとく19世紀からあったわけですから、100年以上も奇術界には存在していました。応用しようと思えば、クローズ・アップのコインやカードにも応用できたはずですし、また実際に応用して演技を行っていたマジシャンもいたはずで、ところが、私たちがその名を知っている有名な奇術師たちで、これを使っている人はいません。すべて故人ですが、ダイ・バーノン、エドワード・マーロー、トニー・スライディーニ、リチャード・ロス、フレッド・カッ

プス、いくらでも名前を挙げることができます。ブラック・アートを使えば、ステージでもクローズ・アップでも、あんなに不思議な現象を演じることができるのに、彼らは誰も使っていませんでした。欧米ではいまでも使っているマジシャンは少ないです。私(麦谷)の手品の先生は高木重朗さんですが、ステージでもクローズ・アップでも一度もブラック・アートを使おうと言われたことはありません。「禁じ手」とまでは言いませんが、なんとなく暗黙の了解があったような気がします。

4. 応用編

ここで話が終わったら、単にブラック・アートを批判して終わりになります。そこでクローズ・アップ奇術専門誌“masquerade”ならではの、ブラック・アートの実践をやってみようと思います。前述のウイル・ツアイのDVDに解説されているものは魅力的ではありますが、どれも実用的ではありません。ここで言う「実用的」の意味を3つ挙げるとすると、次のようなことです。

- ①手品に用いるブラック・アートのギミックの作製が簡単であること。
- ②ブラック・アートの操作が簡単であること。
- ③手品として完成度が高いこと。

このうち、①は、なにしろブラック・アートですから、背景の黒(あるいは保護色)は必須でありますし、カバーするための黒や保護色の準備も必要ですので、最低限の作業は避けられません。また、②は、この場合、インビジブル・スレッドやリールの操作などが必要ないという意味で、カバーを取り去るような、これも最低限の操作は止むを得ないところです。③も、単に品物が出たり消えたりする現象ではなくて、手順として演じられる不思議な現象を目指します。

5. Dean Dill の“EXPLOSION”

話はいきなり関係ないところから始まります。Dean Dill はアメリカ合衆国のマジシャンで、2015年2月に永眠しました。67歳でした。コイン・マジックの名手でしたが、Dean's Box という商品でも有名で、日本でも販売されていました。彼の死後、手品関係の遺品が販売されましたが、私もいくつか入手しました。その中に、“EXPLOSION”というコイン・マジックがあります(写真135)。

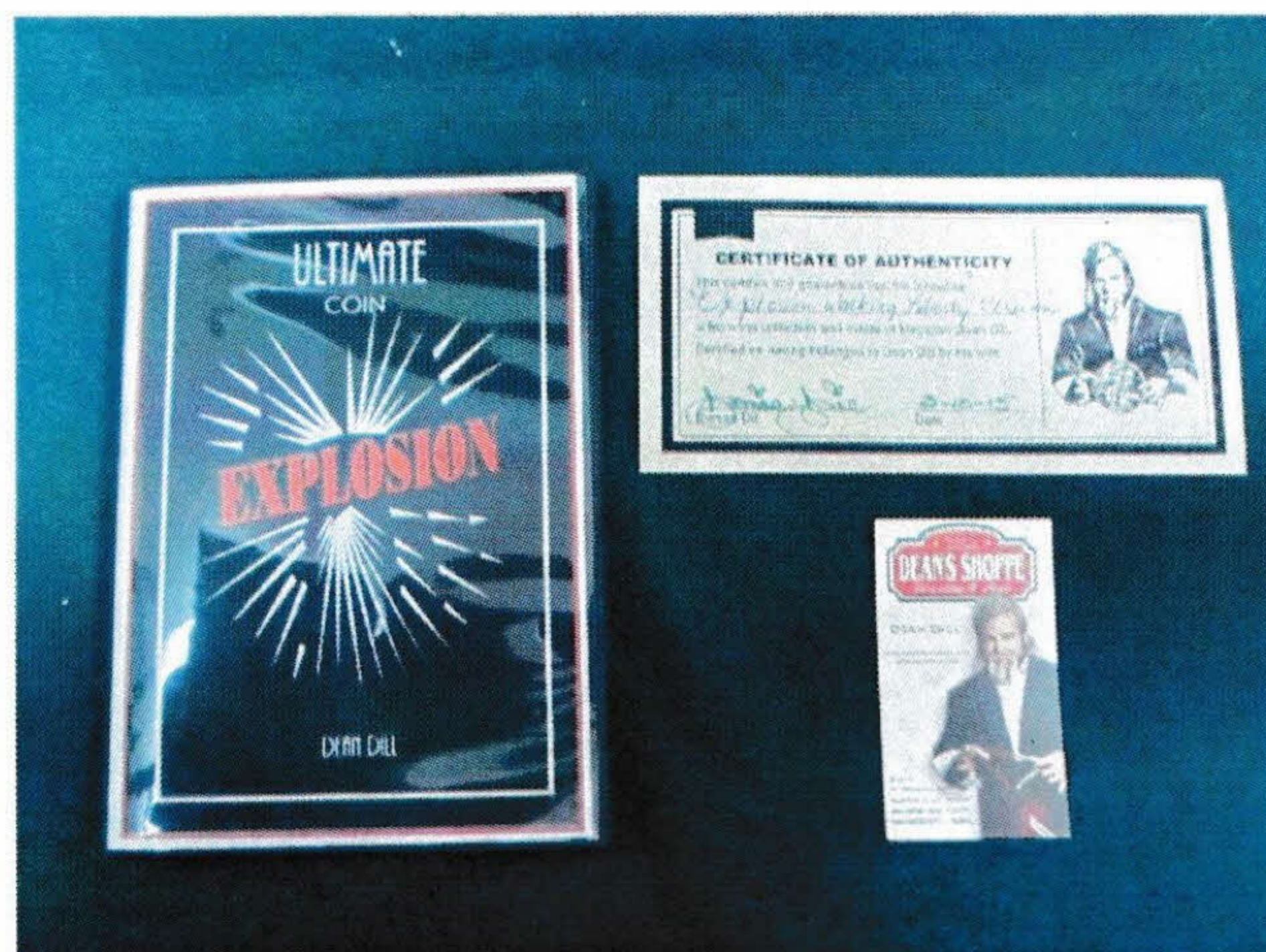


写真135

これは一連のコイン・マジックのルーティンで、4枚のハーフ・ダラー(ウォーキング・リバティ)を使って、コイン・アクロスやコイン・マトリックスを演じて、最後にはマット上に16枚のハーフ・ダラーが出現するというものです。テーブル・マット一面にウォーキング・リバティが広がるクライマックスは壮観です。最初、この実演を観たとき、私はてっきりブラック・アートで、黒いマットの下にコインが隠してあって、それを出しているのだろーと思ひました。したがって、最初のコイン・アクロスやコイン・マトリックスもブラック・アートで演じていると思ひていたのです。しばらくしてセットが売り出されましたが、値段が高かったことと、ブラック・アートだと思ひ込んでいて買いませんでした。でも手品そのものは覚えていたので、Dean Dill が亡くなったとき、追悼の意味で残っていた一つを未亡人の代理のディーラーから買ひました。手にして初めて、これがブラック・アートではなくて技術で演じるコイン・マジックと知ったのです。ちなみに、このコイン・セットは Jamie Schoolcraft の手によるもので、実は Dean Dill の死後も販売されています。価格はウォーキング・リバティのもので、1セット1500ドル(約16万円)です(写真136)。



写真136

ということで、この手品を初めて観たとき、私がブラック・アートだと思ひたのはすでに述べました。それは、あまりにも現象が鮮やかだったのと、あれだけの数のコインをパームしては運べないだろうと思ひたからです。結論から言うと、コイン・アクロスとコイン・マトリックスは、ギャフ・コインもさることながら、Dean Dill の技術によるところが大きかったのです。

そこで、コイン・マトリックスをなんとか特別の技術なしで、ブラック・アートを使って解決できないかというのが今回の課題です。コイン・マトリックスは有名な手品ですから、YouTube などでも動画で演技と解説をしている人を見かけます。カードを使ったコイン・アセンブリーやチンカチンクもそうですが、左右の手を交差させないのが原則です。コインの移動の現象上、マジシャンの左右の手を交差させる理由がないのです。それなのに、YouTube の人は最後のクライマックスのときに、平気で両手を交差させていました。もちろん Dean Dill は一度も両手を交差していません。私は以前の masquerade でもインターネットで流れている“Blue Phantom”の演技が違っていると指摘しましたが、たぶん手品の動画を公開しているマジシャンたちは、自分の間違いに気付いていないのだと思ひれます。残念なことです。

6. Dean Dill のコイン・マトリックス

さて、コイン・マトリックスそのものは、余分なコインを1枚パームしていれば演じることが可能です。コインが4枚しかないことと両手が空であることを見せたければ、余分な1枚のコインを使う代わりにシェルを1枚使えば解決します。そこでまず、ブラック・アートを使ったコイン・マトリックスを考える前に、シェルを2枚使った Dean Dill のコイン・マトリックスを紹介します。シェルは1枚でもいいのですが、2枚使うと無理な動きがなくなりますし、ずっと両手が空であるような印象を与えることができます。

[現象] テーブルのマットの四隅に置いた4枚のコイン(ハーフ・ダラー)が、一枚ずつ集まったり、一瞬にして離れたります。

[必要なもの]

- ① 普通のハーフ・ダラー 4枚
- ② ①のハーフ・ダラーに被さるエキスパンディッド・シェル 2枚
- ③ テーブル・マット(必須ではありませんが、あったほうが動きがスムーズです)

[準備]

4枚のハーフ・ダラーのうちの2枚にエキスパンディッド・シェル(以下、単に「シェル」とだけ記述)を被せておきます。解説の便宜上、シェルの上に黒いテープを貼ってあります。

[やり方]

- ① 4枚のコインの表裏を軽く見せてから、コインをマットの4隅に置きます。このうち、シェルの被ったコインは、マジシャンから見て、右下隅と左上隅です(写真137)。

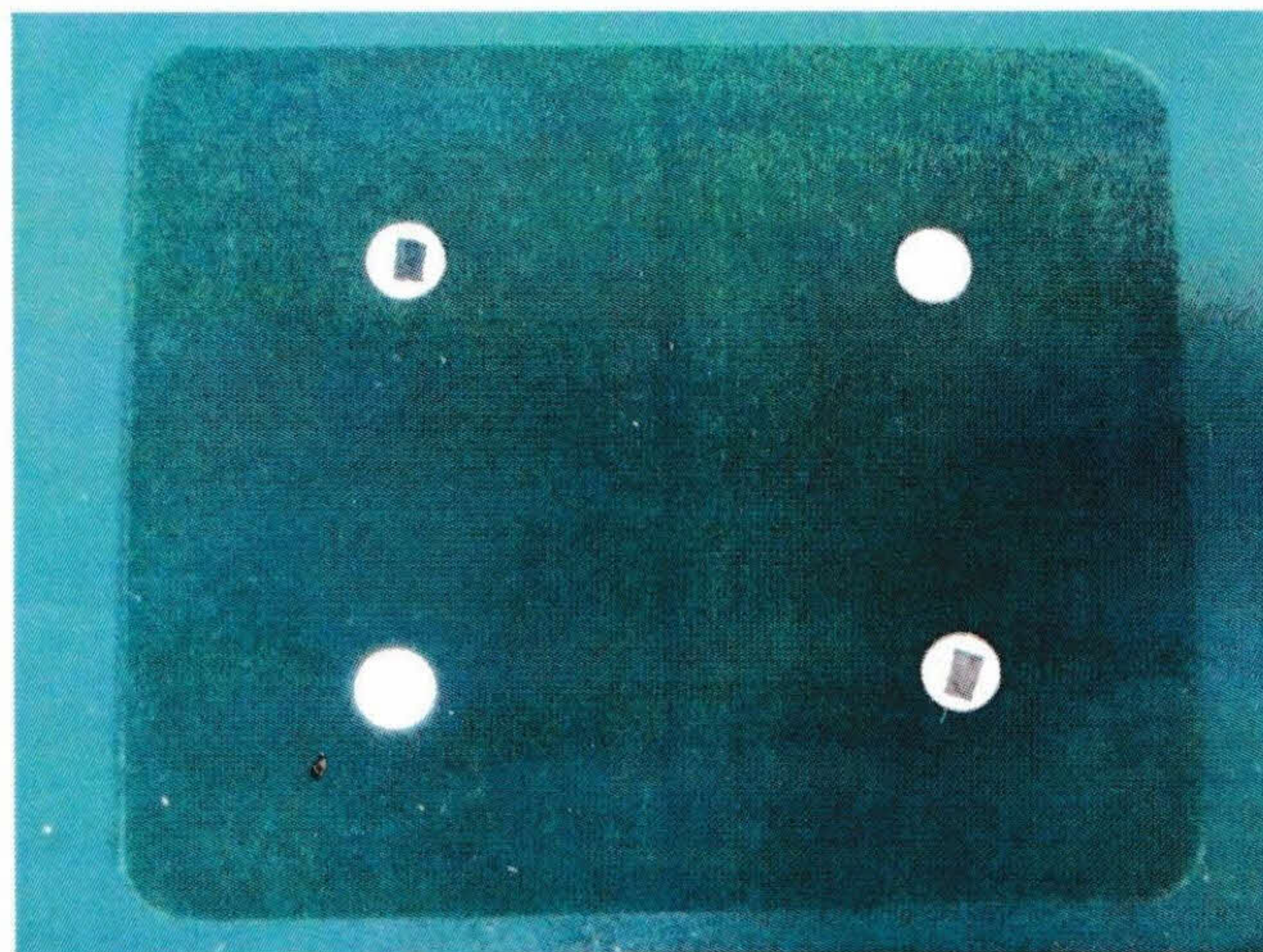


写真137

- ② まず、右下隅のコインを右手で、左上隅のコインを左手でカバーします。この動きの中で、左手の人差指と小指とでシェルを挟んで持ち上げて外し、コインの上方(観客側)にひそかに置きま

す。右手はちょっと動かしながら、右掌の下で、コインを右手小指の下の膨らみに送り、その位置でコインを押さえます。そのまま、左手を持ち上げて下にずらし、右手はコインを押さえたまま右横にずらせば、あたかも右下隅のコインが左上隅に移動したように見えます(写真138)。左右の手の動きは同期しています。なお、コインを押さえていない右手の指はマットから浮かして自由にしていると、コインが完全に消えたように見えます。

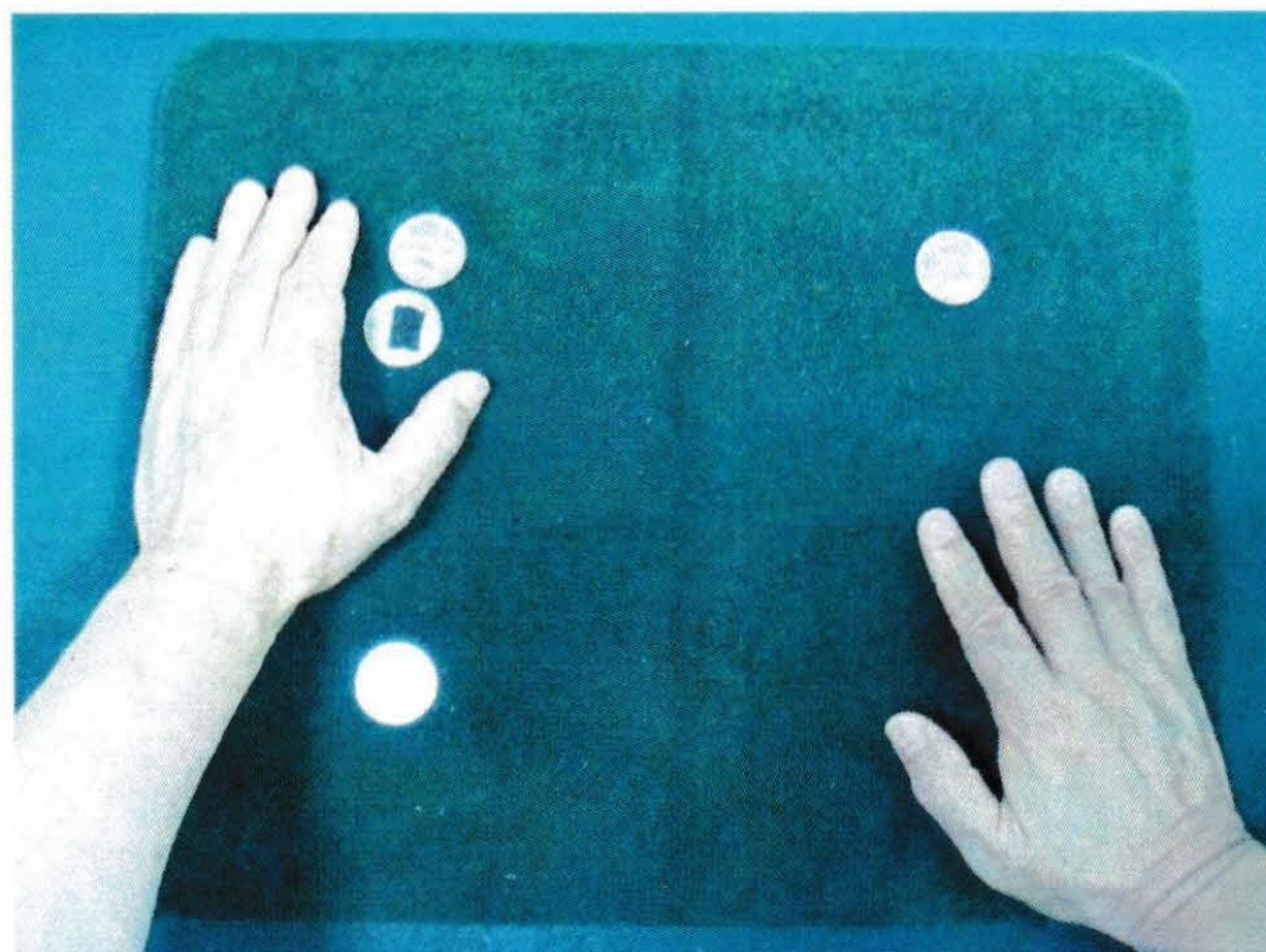


写真138

- ③次に、右手を、コインを押さえたまま上方にずらして右上隅のコインを右手でカバーします。右手の下には2枚のコインがあることになります。左手は、左上隅のコインをカバーするようにしますが、このとき、上方のシェルを下方のコインに被せてしまいます。両手を挙げると、左手(左上隅)から1枚のコインが右手の下(右上隅)に移動したように見えます(写真139)。この段階では両手が空であることを見せることができます。

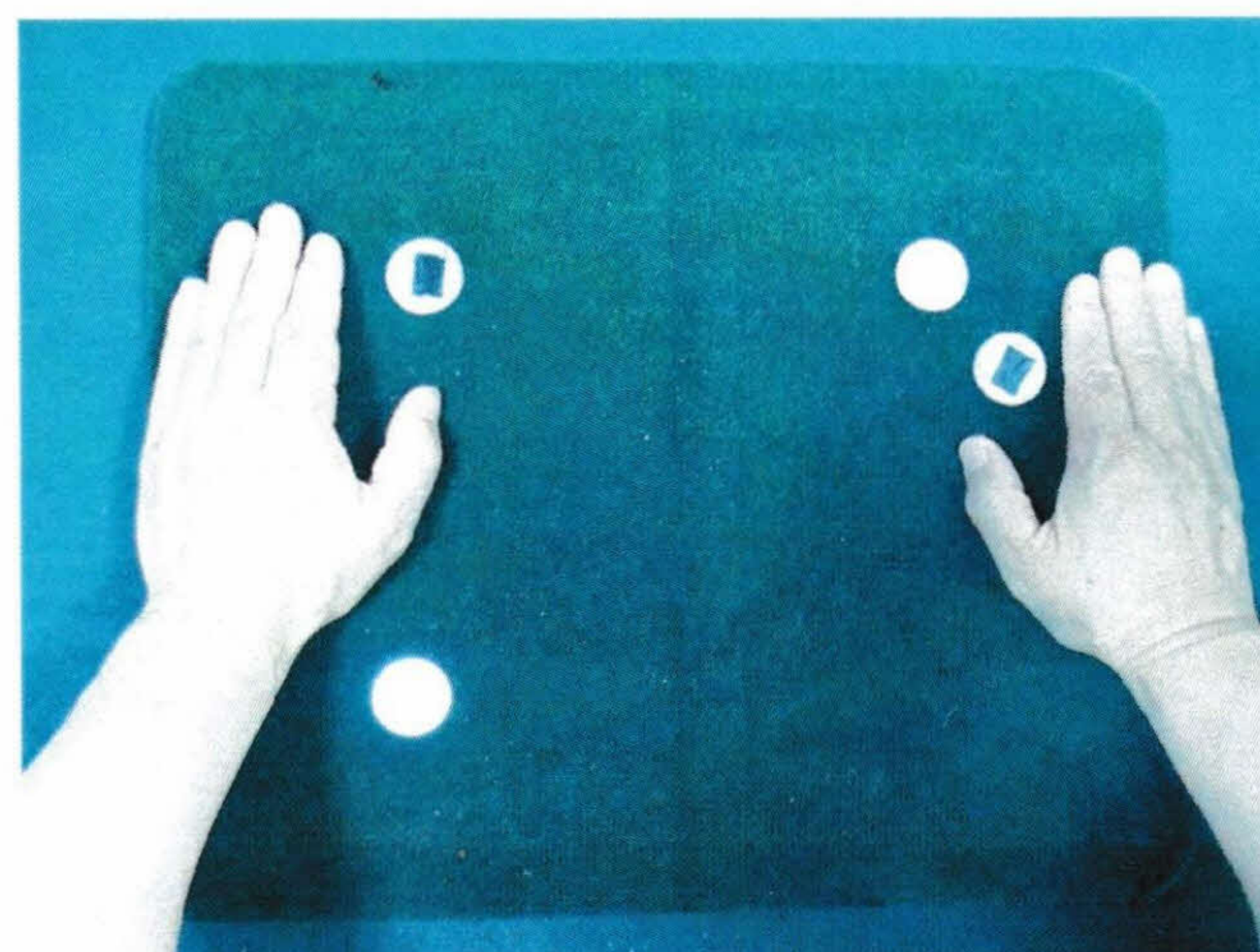


写真139

- ④今度は、右手で左下隅のコインをカバーし、先ほどと同じように右手小指の下に膨らみにコインを移動させます。左手は左上隅のコインをカバーしながら、再びシェルを外してコインの上方に置きます。結果として、左手の下はコインが2枚に見えるようになりました。左手を挙げてコインが2枚になったと見せると同時に、右手を右横にずらして左下隅のコインが消えて左上隅に移

動したことを見せます(写真140)。右手の下にはコインを1枚押さえています。

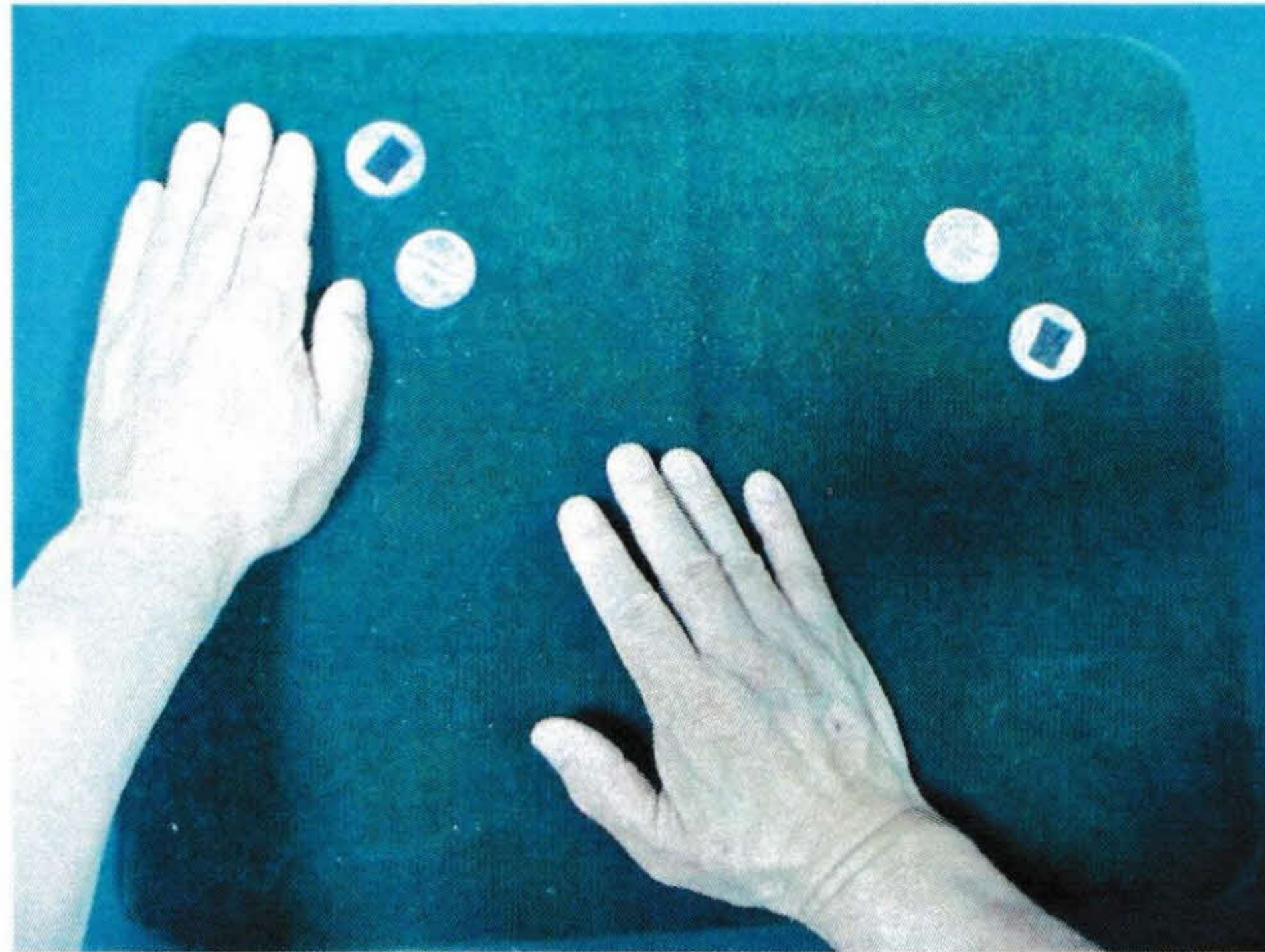


写真140

- ⑤右手をそのまま上方に移動させて右上隅のコインをカバーします。右上隅にはすでに2枚のコインがありましたから、右手の下に押さえていたコインとで3枚になったことになります。左手は、左上隅のコインをカバーしますが、今度も、シェルを持ち上げて、下方のコインに被せてしまいます。両手を持ち上げると、左上隅のコインは1枚になり、右上隅のコインは3枚になっています(写真141)。再び、両手は空であることを見せることができます。

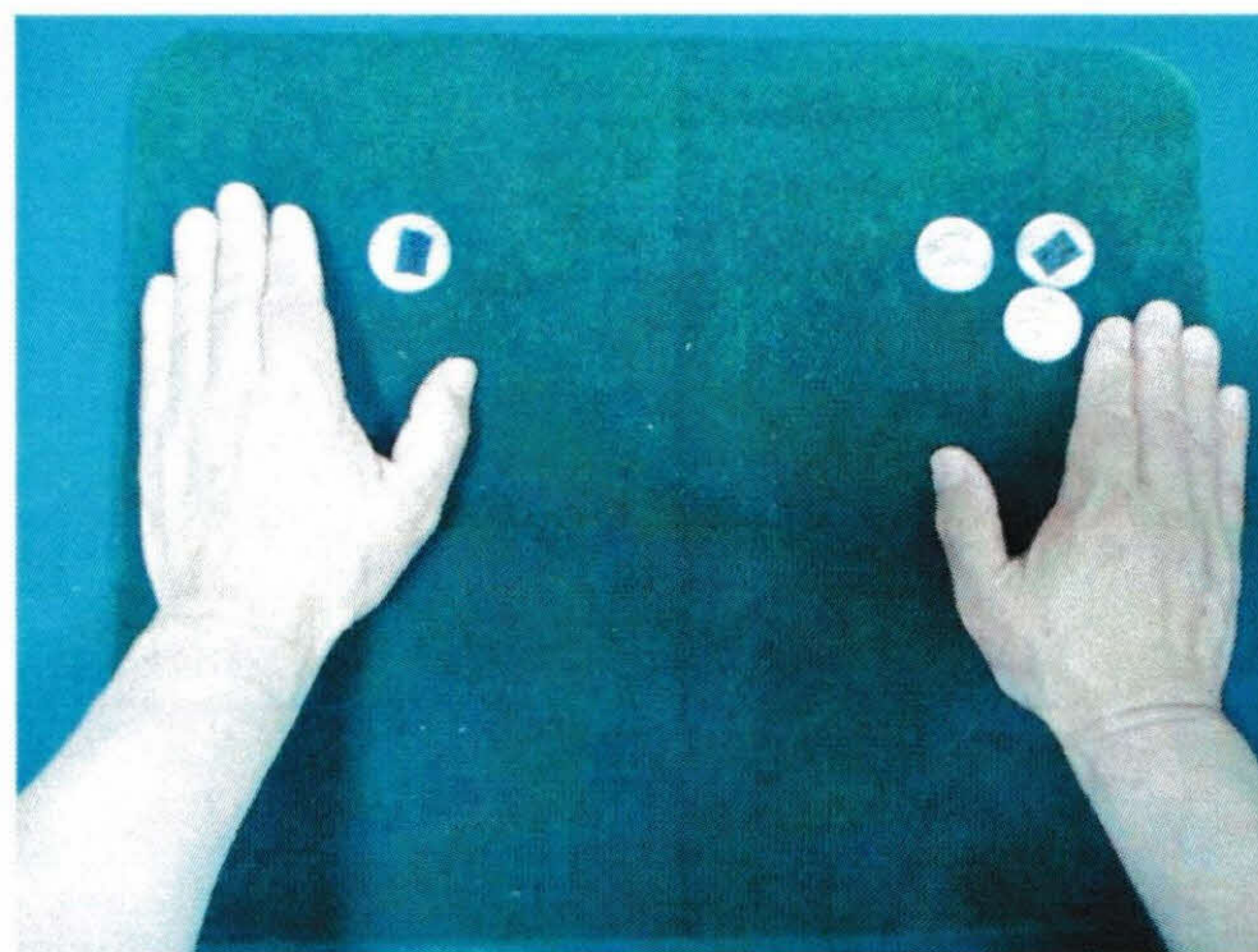


写真141

- ⑥左手で左上隅のコインをカバーします。右手で右上隅の3枚をカバーしますが、このとき、さっき右下隅から加えたコインのシェルを外して、そのコインの上方に置きます。これで右手の下は4枚になりました。同時に、左手は、左上隅のコインを左小指の下の膨らみで押さえて左横にずらし、コインが消えたように見せます(写真142)。このあとの左手下のコインの処理は、Dean Dill は上手なのですが、動きがちょっと上級者向きなので、ここでは、両手を右上隅の4枚のコインを集める動作で合わせ、右手下の4枚のうち、シェルを下方のコインに被せ、その代わりに左手下のコインを右手下の残りの3枚に合わせるようにします。結果として、テーブル上には4枚のコインだけが残し、この段階で両手は空であることを見せることができます。ちなみに、手

の下でコインを押さえる場合、小指の下方の膨らみで押さえると書いてきましたが、これは Dean Dill のやり方で、David Roth などには親指下の膨らみを使うように言っています。いずれにしても、これらのカバーは、指が浮いていて自由に動くので、手が空に見え、コインを押さえていることが観客に気づかれないので便利です。

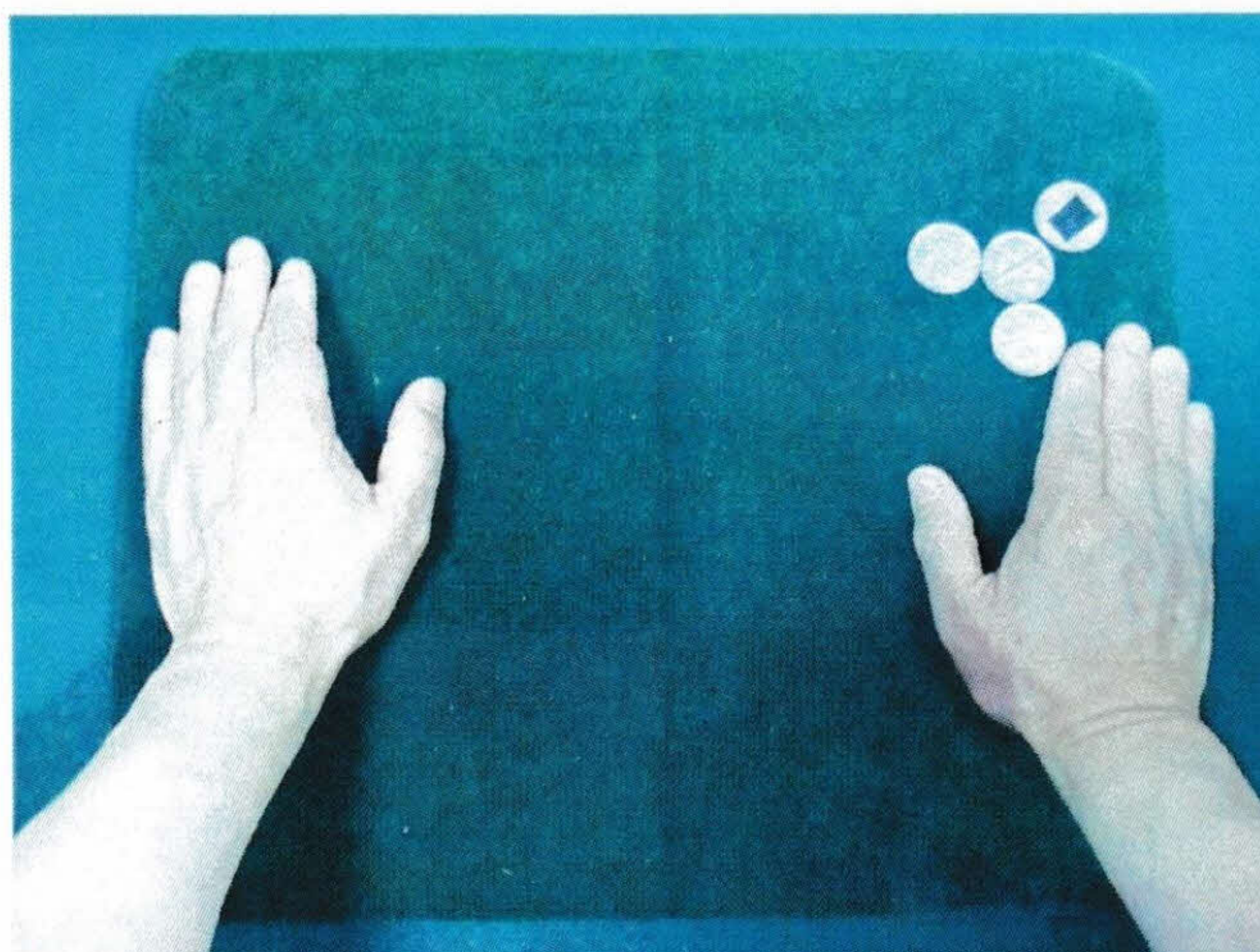


写真142

- ⑦次に、今度は一瞬で四隅の4枚のコインが一箇所に集まります。流れるように動作を行ないます。まず、いま前段が終わったばかりの4枚のコインを横一列に並べます。シェルの被っているコインを右端と左から2番目のコインにします。この状態で、左手の小指の膨らみで左端のコインを押さえながら、左から2番目のコインを観客から見えるようにテーブル・マットの左上隅に持って来ますが、このとき同時に右手は右端のシェルを外して、シェルだけをマットの右上隅に持って来ます。すると、マット上には2枚のコインだけが残りますから、それぞれ、右側のコインを右下隅に左側のコインを左下隅に持って来ます(写真143)。

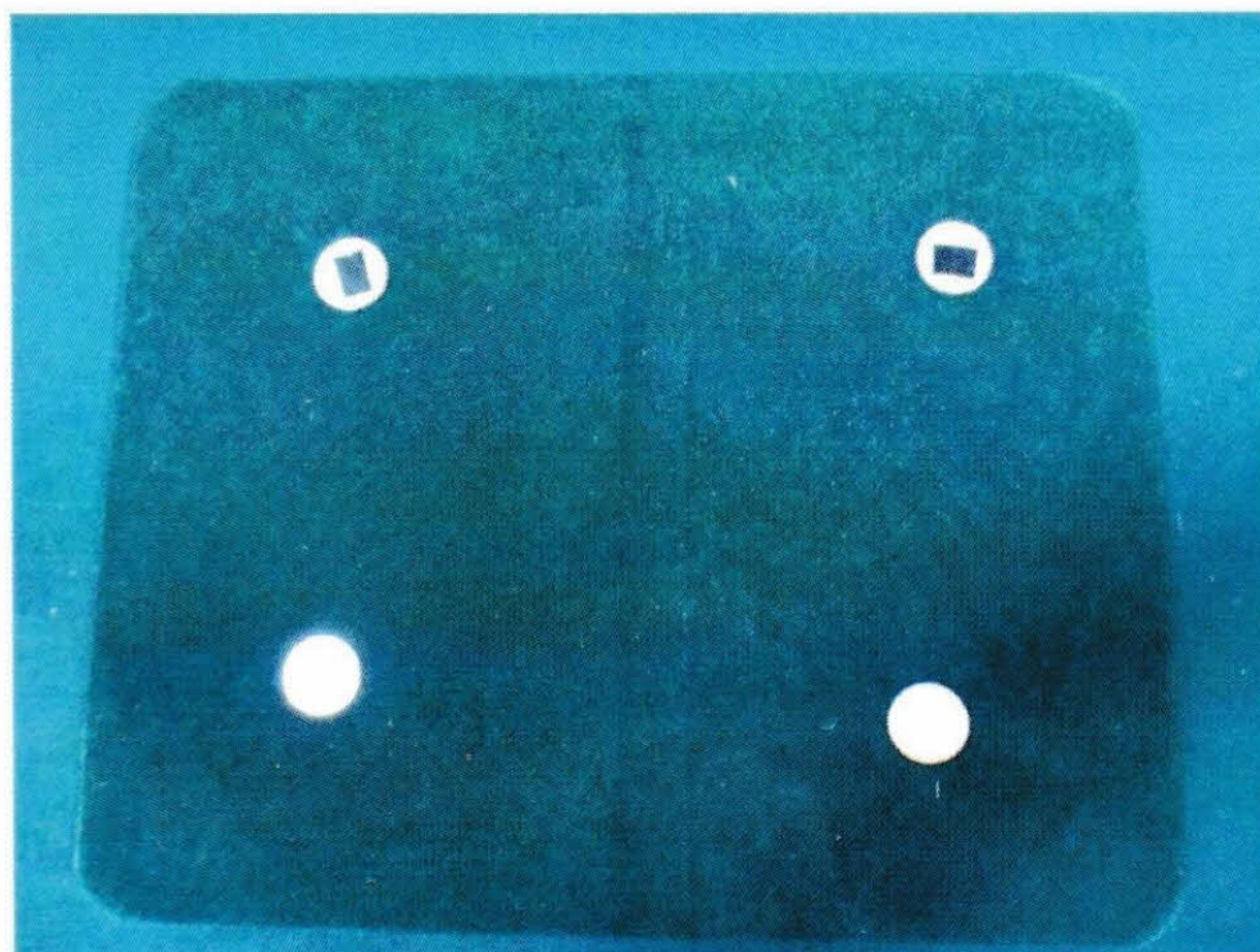


写真143

- ⑧両手で、四隅のコインをカバーして見せる動作で、次のことを行ないます。左手は小指の下の膨らみで押さええているコインを左上隅に動かし、同時に、左上隅に置いてあるコインのシェルを外してコインの上方に置きます。ただちに、シェルだけを残し、2枚のコインを左手の下に押さえ

て左下隅に戻します(写真144)。写真144は、手を除けてコインの状態を見せたものです。

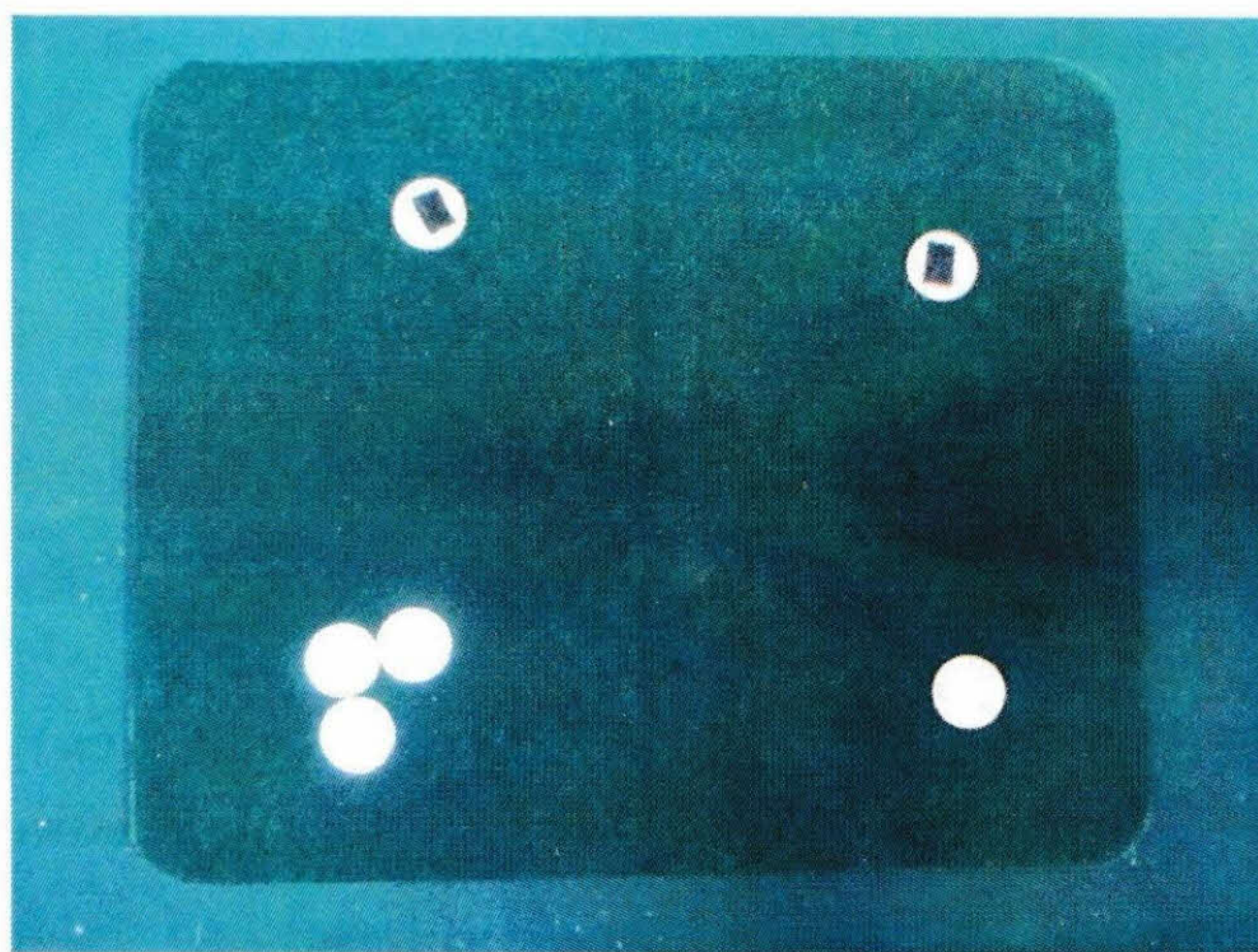


写真144

- ⑨次の動きは両手を連動させます。左手は手の下にある3枚のコインをすべて押さえて左上隅に移動させます。同時に、右手は右上隅のシェルを引いて、右下隅のコインに被せ、このコインを持ち上げてクラシック・パームします。両手を同時に上に挙げると、一瞬にして四隅のコインが左上に集まったように見えます(写真145)。

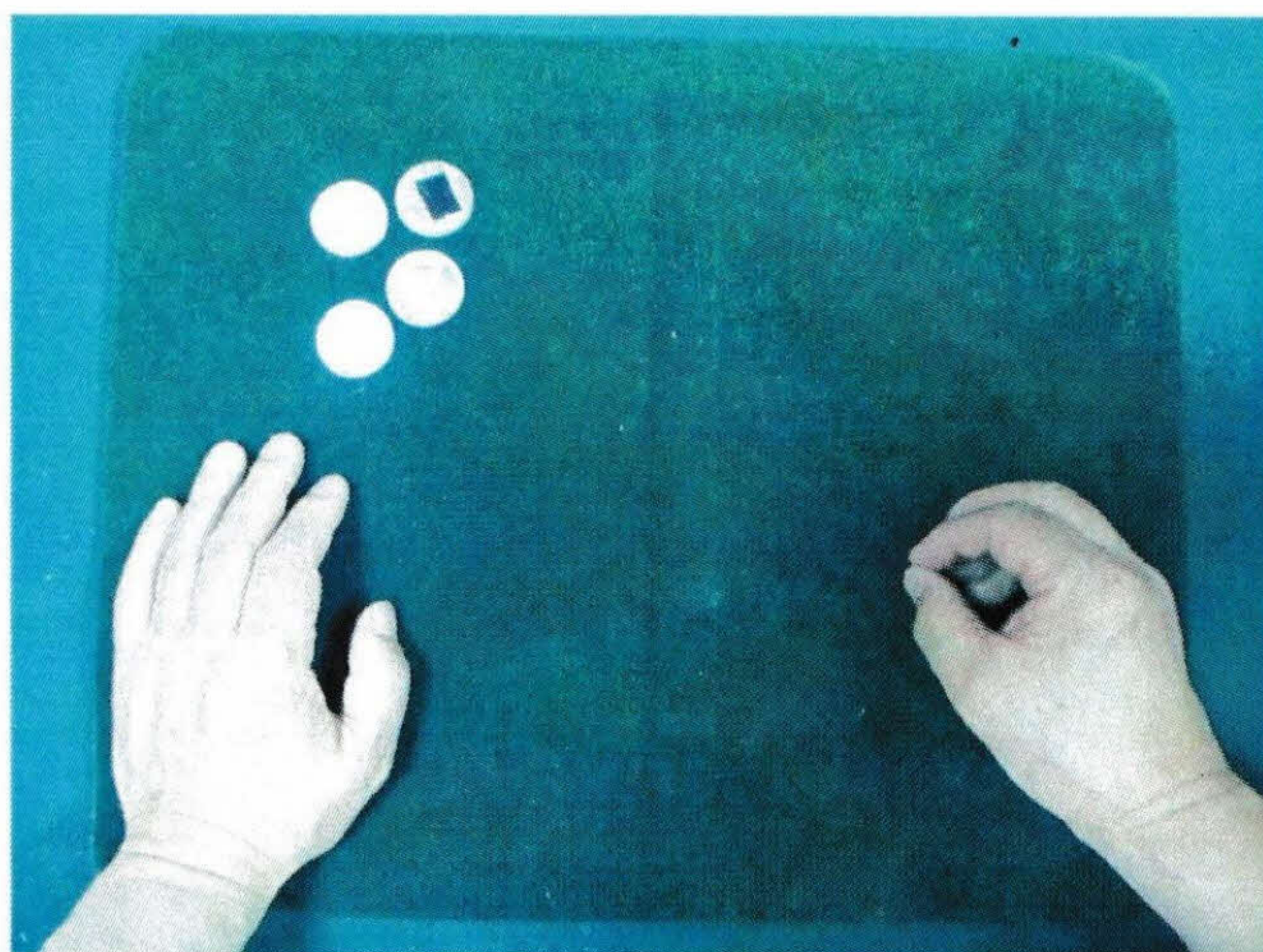


写真145

- ⑩右手のパームをフィンガー・パームに換えます。両手を左上隅の4枚のコインに近づけ、シェルをコインに被せながら右手にパームしているコインを合わせます。するとコインは4枚のままですから、この4枚のコインをマットの中央に置けば両手は空です。

7. コイン・マトリックスをブラック・アートでやってみる

基本的な[現象]は同じです。ただし、なにしろブラック・アートを使うわけですから、できるだけマジシャン側の技術が少ないほうがいいですし、また観客からも、鮮やかに見えることが大事です。また、このために自分で準備する前工作も最小限のものにしたいと思います。

[必要なもの]

①ハーフ・ダラー 3枚

②①と同じハーフ・ダラーの4重シェル 1個 (これは、奇術材料店で入手できますが、特にコイン専門店でもなくても訊けば取り寄せてくれます。日本では、岡山の手品工房(有)クライスが1964年のケネディ・ハーフ(銀の含有量が多いものです)で作った4重シェルを製造・販売しています(写真148の右側)。ちなみに(有)クライスの1964年ケネディの価格は1セット27,000円です。

③黒のベルベットの生地。最近では本物のベルベットではなくて化学繊維のベロアが売られていますからそれで十分です。マットを作る分と3枚のハーフ・ダラーの裏面に貼るくらいが必要です。

[準備]

①適当な段ボールを、用意した黒のベルベットで包んでマットにします。大きさは、それぞれの好みがあると思いますが、私が作ったものは33cm×43cmです(写真146)。

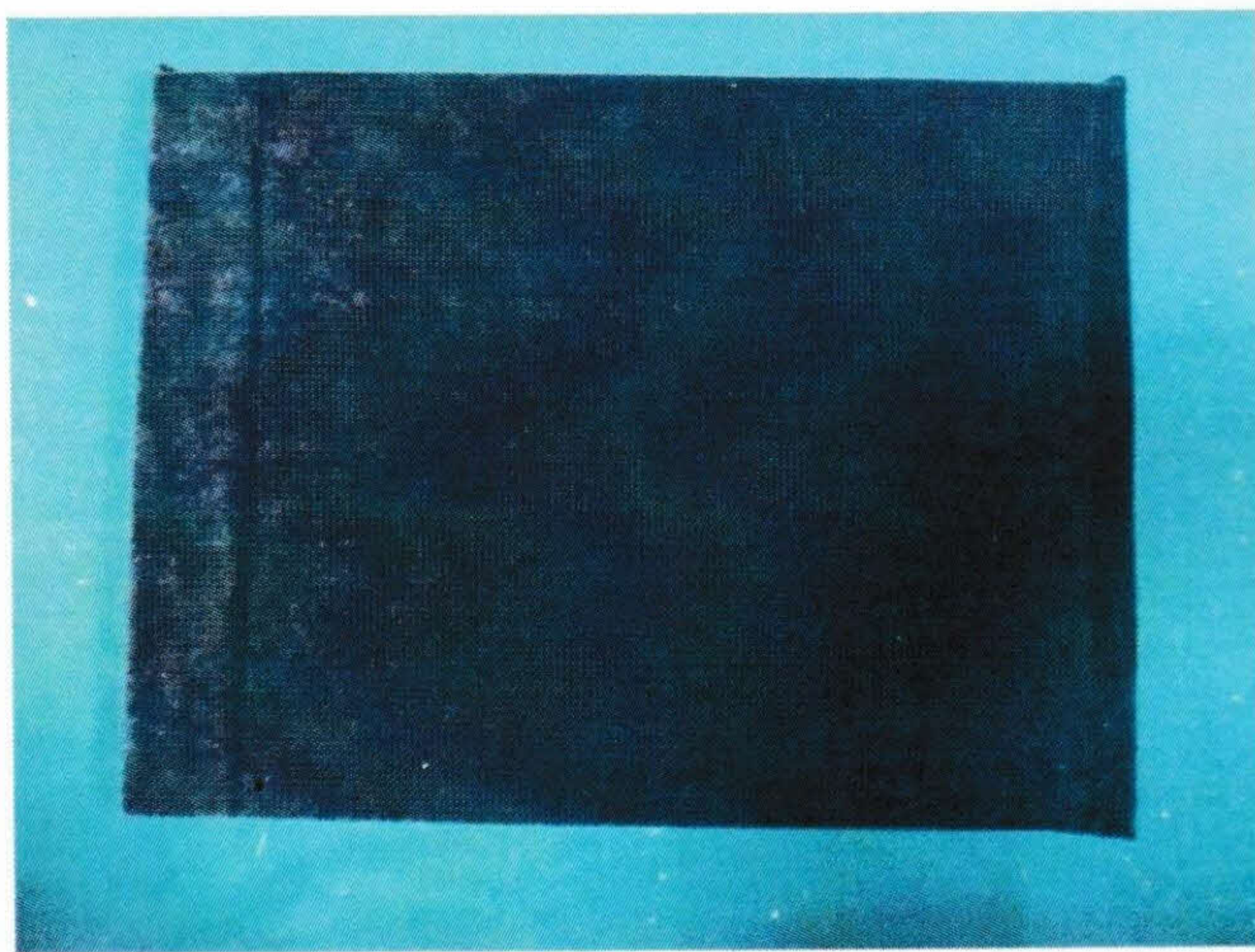


写真146

②3枚の普通のハーフ・ダラーの裏に黒のベルベットを貼りつけて、コインの形に丸くトリミングします(写真147)。このままだと、側面からコインの銀色が見えますから、黒のマジック・インクで側面も黒く塗って目立たないようにします。ただし、写真147のコインの側面は塗ってありません。

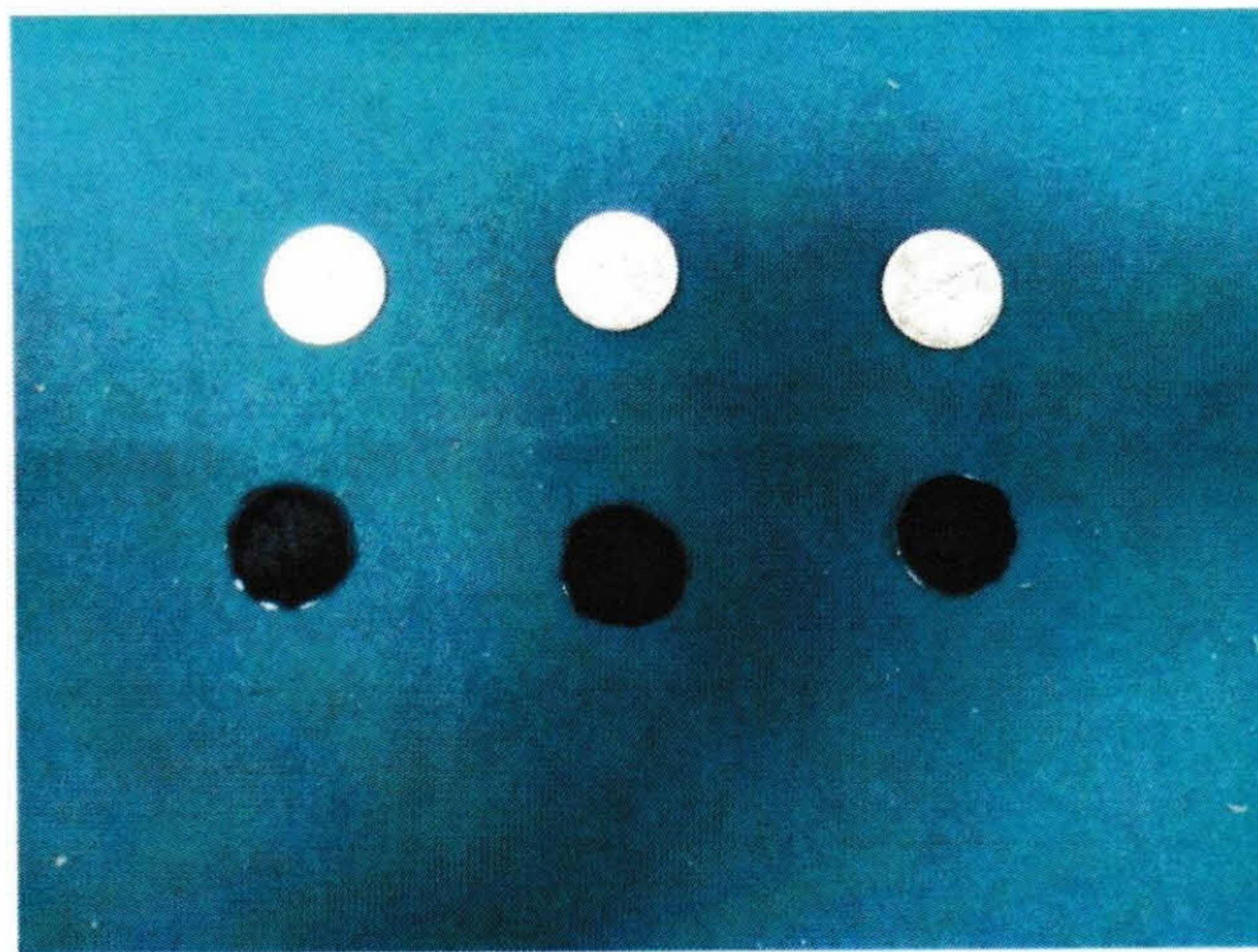


写真147

③参考までに私が持っている1964年ケネディ・ハーフとウォーキング・リバティの4重シェル・コインを示しておきます。製造したのは、1964年ケネディ・ハーフが前述の(有)クライスで、ウォーキング・リバティが Jamie Schoolcraft です(写真148)。後者は、HP のカタログにもないので、コインの種類の希望を書いたメールを送って価格を見積もってから注文することになります。おそらく現在では400ドル前後(約4,3000円)しますから、(有)クライスから買ったほうが安いです。



写真148

[やり方]

- ①黒いマットの上に、4枚のハーフ・ダラーをやや重ねて示し、ただちに、1枚ずつマットの4つの隅に配置します。マジシャンから見て、左上隅に4重シェル、残りの裏面黒の3枚のコインをそれぞれ右上隅、左下隅、右下隅に置きます(写真149)。

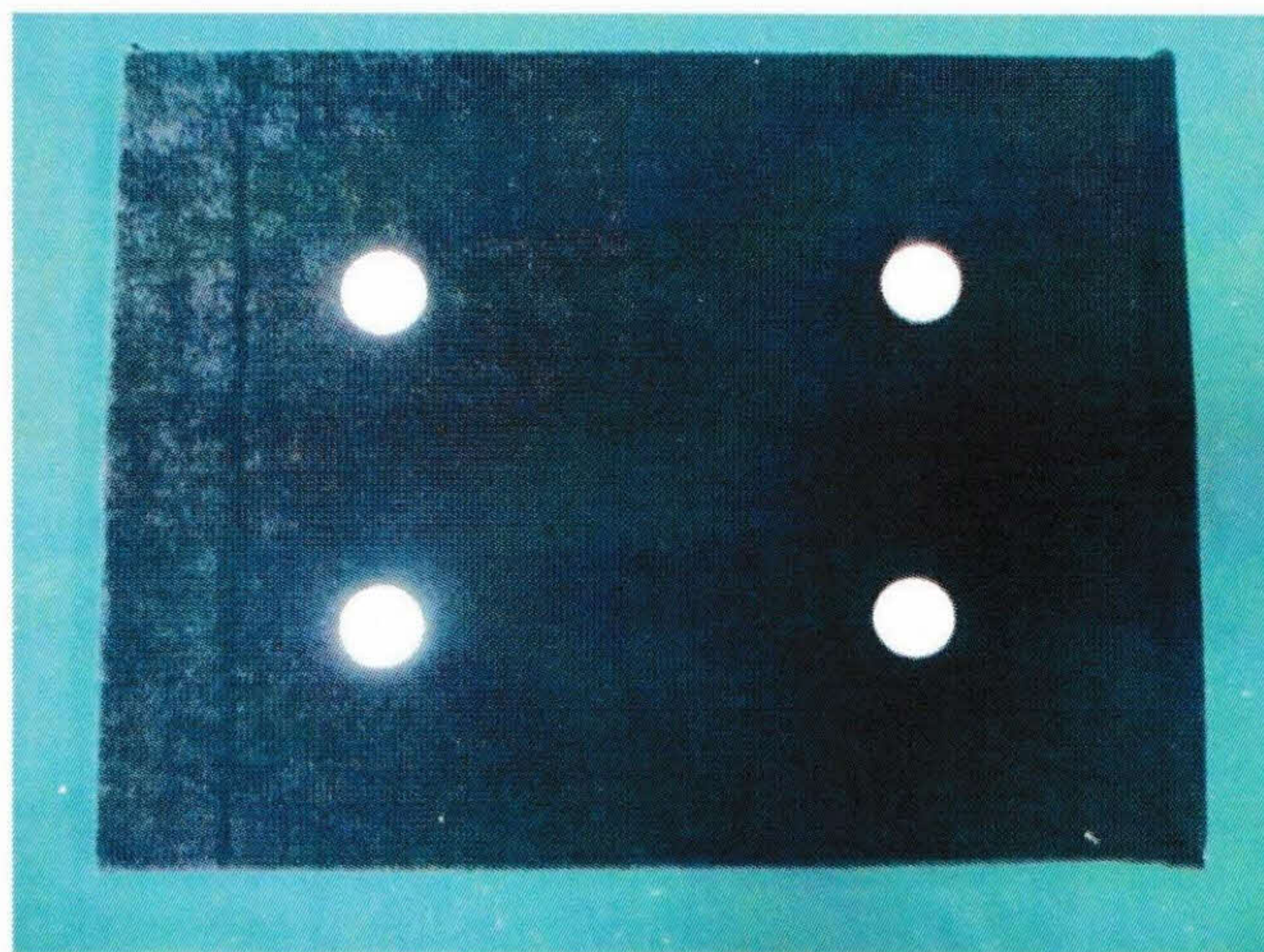


写真149

- ②両手が空であることを何気なく見せてから、いくつかの場所のコインを手でカバーして見せます。「こうして手でカバーするとコインは見えませんが」と言いながら、右手で右下隅のコインをカバーします。同時に左手を動かして、左手で左上隅の4重シェルをカバーします。動いている左手に観客の視線が集中している間に、右手は、手の下にあるコインを裏向きにひっくり返します。これは次のように行ないます。もし、マットのクッションが十分に深いものであったら、右薬指のつ

け根でコインの右側を上から押して左側を跳ね上げ、右手を少し右側に動かしながら、親指をやや下方に下して、この親指の先端を左からコインに当てて、コインをひっくり返します(写真150)。もし、マットのクッションが十分に深くなくて、コインの左側が浮き上がらない場合は、右手を被せるときに右親指でコインの左側を起こしてひっくり返します(写真151)。

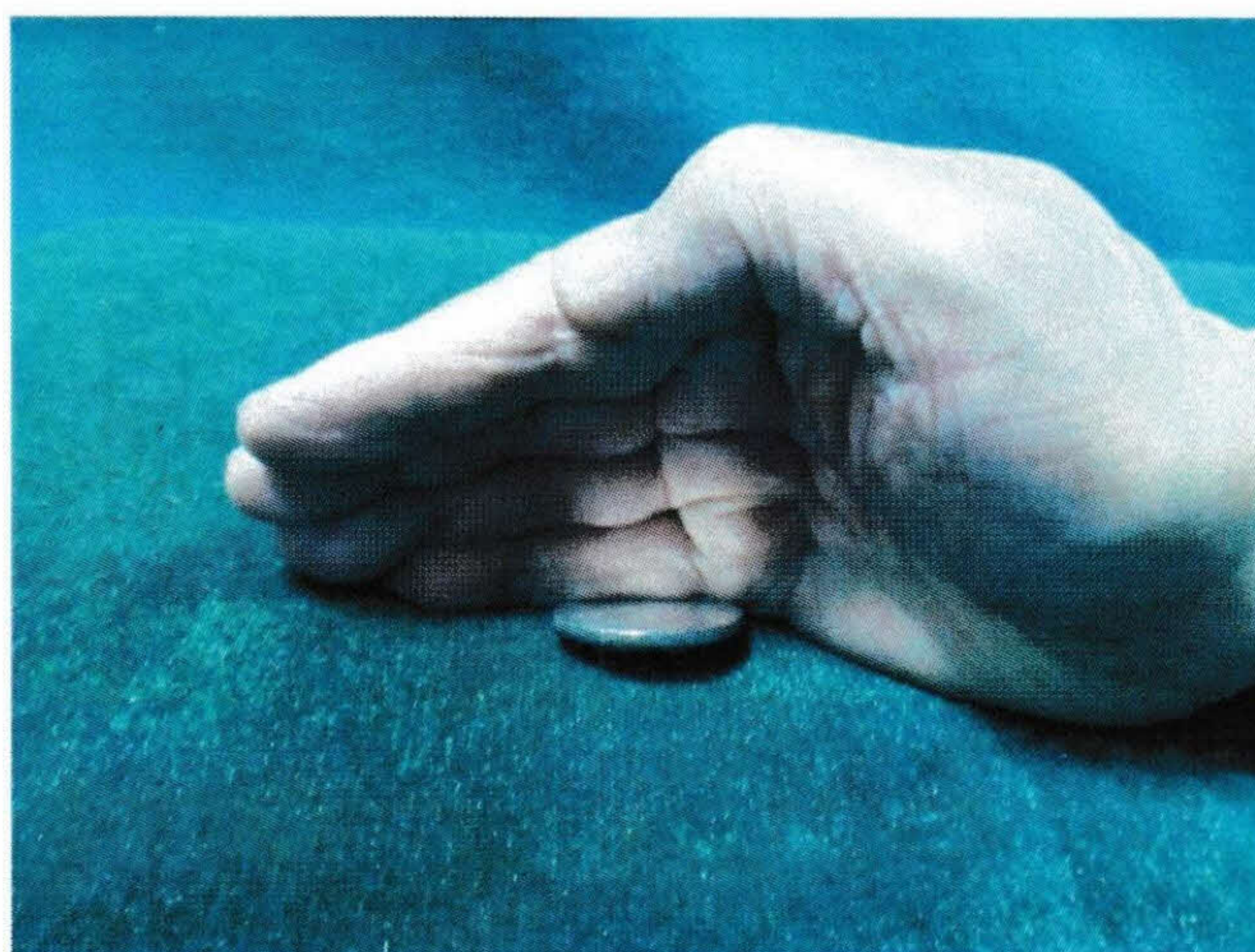


写真150

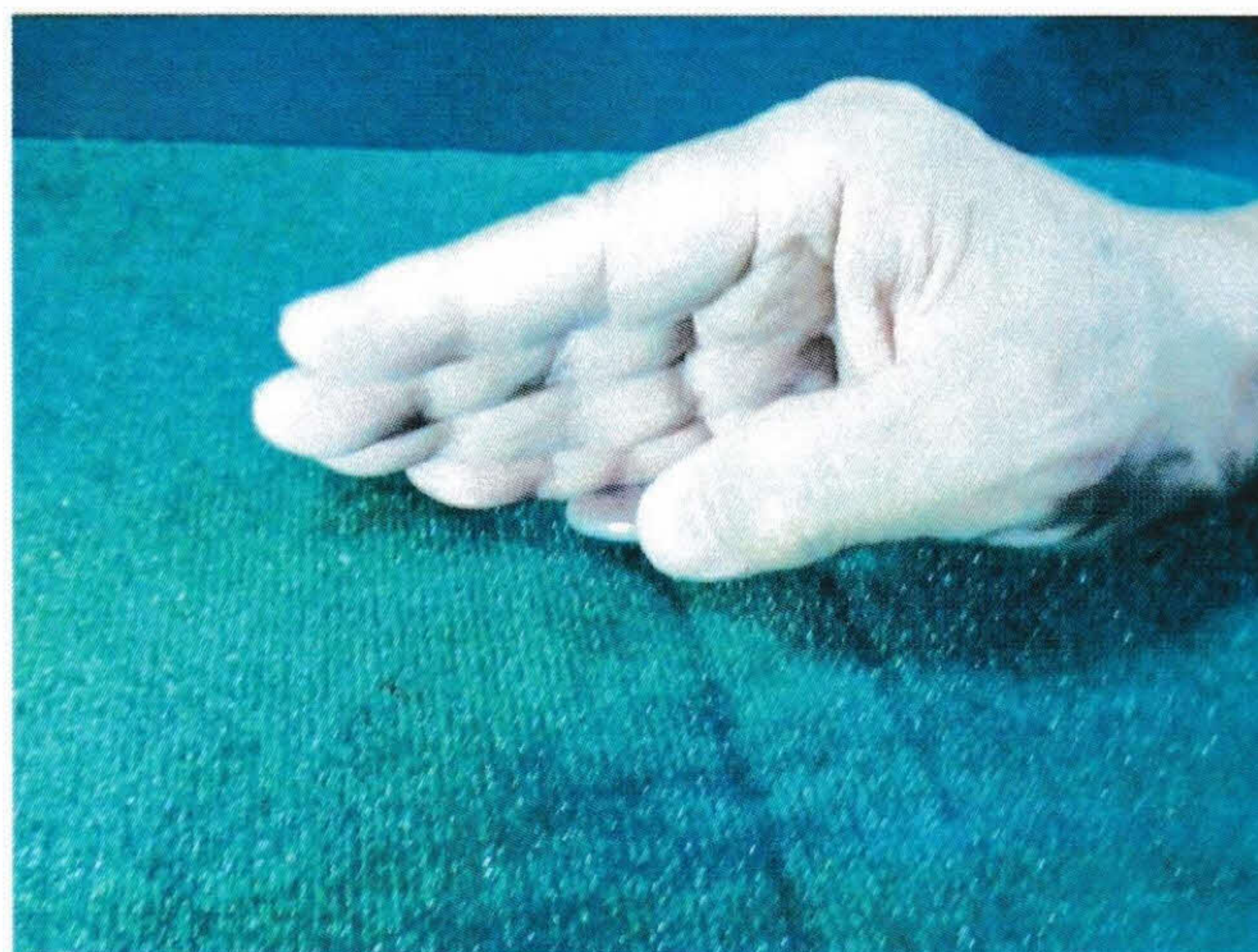


写真151

- ③左手は、人差指と小指とで4重シェル・コインの一番上のシェルだけを挟んで持ち上げて外し、残りのシェル・コインの上方に置いて手をカバーします。
- ④「そうすると、コインは見えないうちに飛行するのです」と言って、両手を上に挙げて手のカバーを外すと、右下隅のコインは、ブラック・アートで見えなくなっているので、消えて移動したように見えます。また、左上隅のコインは2枚になっていますので、結果として、観客からは右下隅のコインが見えないうちに左上隅に移動したように見えます。
- ⑤「もう一度やってみましょう」と言いながら、右手を右上隅のコインをカバーします。カバーする動きの中で、右上隅のコインをひっくり返します。同時に左手を再び左上隅のコインをカバーしに行きますが、さきほど同じように、左手の人差指と小指とで3重シェルの一番上のシェルを持ち上げて外し、すでにある2枚のコインの上方に置きます。

- ⑥「ご覧ください」と言って、左右の手をそのまま上に挙げます。右上隅のコインは、ブラック・アートによって見えなくなっています。左上隅には3枚のコインがあります。「またコインが見えないうちに飛行しました」。
- ⑦「もう一枚残っています」と言いながら、左手を左上隅の3枚のコインをカバーします。左手人差し指と小指とで、シェルが被さっているコインからシェルを外して残りの3枚のコインの上方に置きます。右手は、左下隅のコインをカバーして親指を使ってコインをひっくり返します。
- ⑧「最後のコインです」と言って、まず、左下隅の右手を挙げて、コインが消えたことを示します。実際はブラック・アートでその位置に残ったままです。次に左手を挙げて、左上隅に4枚のコインが飛行していることを示します(写真152)。写真152のブラック・アートのコインは、解説の便宜上、側面を黒く塗ってありませんので、コインの輪郭が見えると思いますが、実際の演技では、コインの縁も黒く塗ってあるため、観客からはコインが見えません。

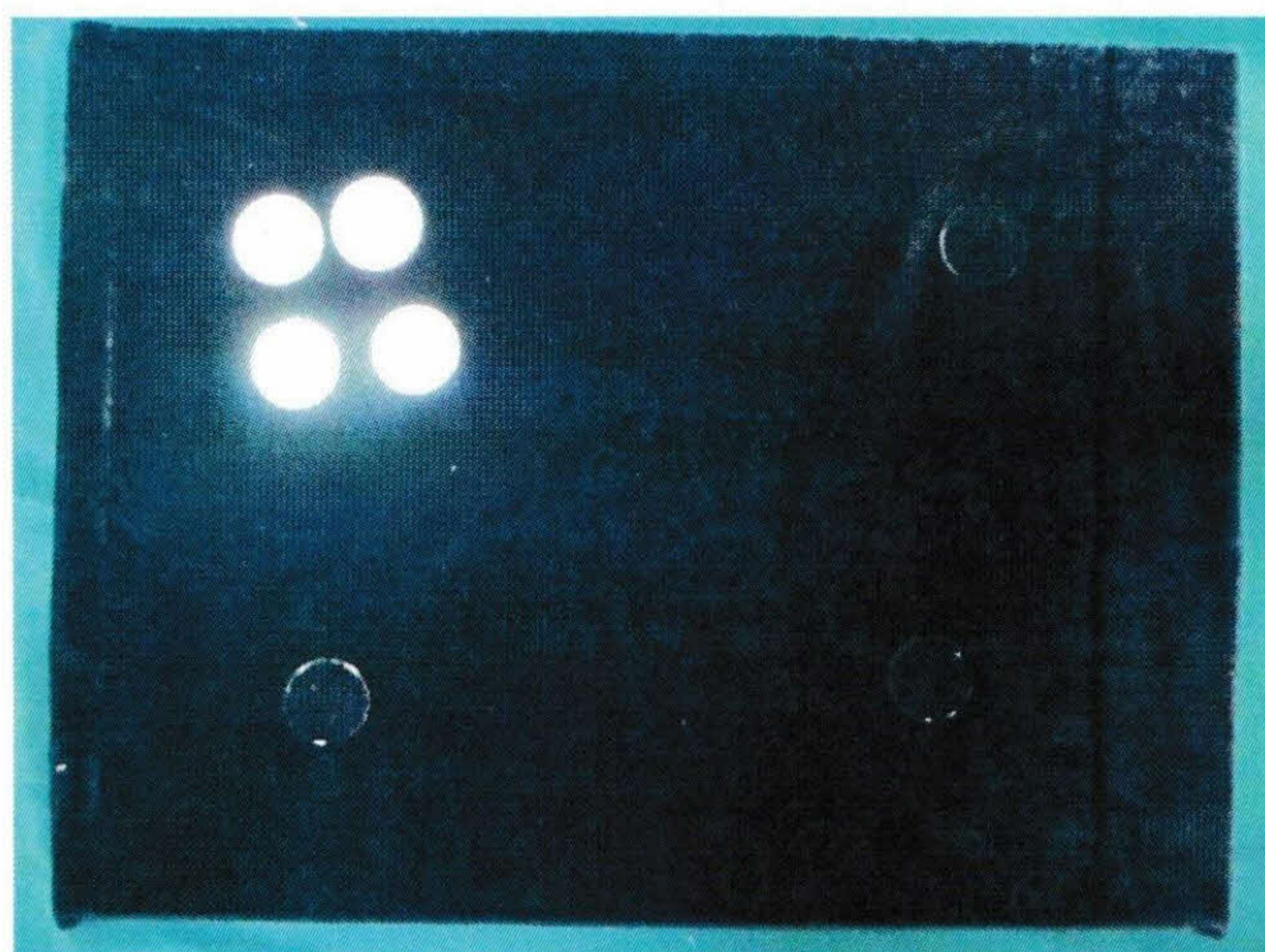


写真152

- ⑨今度は逆の現象を行ないます。左上隅の4枚のコインを一瞬のうちに四隅に散らせねばなりません。さきほどの作業をまったく逆に行なうわけですが、まず、左上隅の4重シェル・コインを元通り1枚のコインのように重ね戻さねばなりません。しかし、このままの状態を重ねるのは無理です。まず、4枚をやや大きく四角形のまま拡げて置き、左手を上置いて、コインが一部はみ出るような状態を見せます(写真153)。実際は、上手にカバーすればはみ出ることはないのですが、手をどちらか左右に振って、コインの一部が手の下からはみ出るような仕草をします。そこで、このままでは4枚のコインが手からはみ出してしまうような様子を装い、4重のシェルを一瞬で重ねやすくするために、弧を描くように重ねて置き直します(写真154)。このとき、余計なことを言う必要はありません。観客からは、左上隅の4枚のコインしか見えていませので、マジシャンが左手で左上隅の4枚のコインをカバーしようとしていることは一目瞭然だからです。
- ⑩右手を、右上隅のコインの上に置きます。左手は4重シェル・コインを一気に重ねつつ、まず、右手のコインをブラック・アート面からひっくり返して表向きにします。空いた右手は直ちに右下隅のコインの上に置きます。左手は左上隅の4重シェルを重ねたら手を離して1枚のコインになった4重シェル・コインを表し、ただちに、左下隅のコインの上に持って来ます。左右の手の下に

あるコインをそれぞれひっくり返してブラック・アートから解除します。観客からは、左上隅にあった4枚のコインが一瞬のうちに四隅に散ったように見えます(写真155)

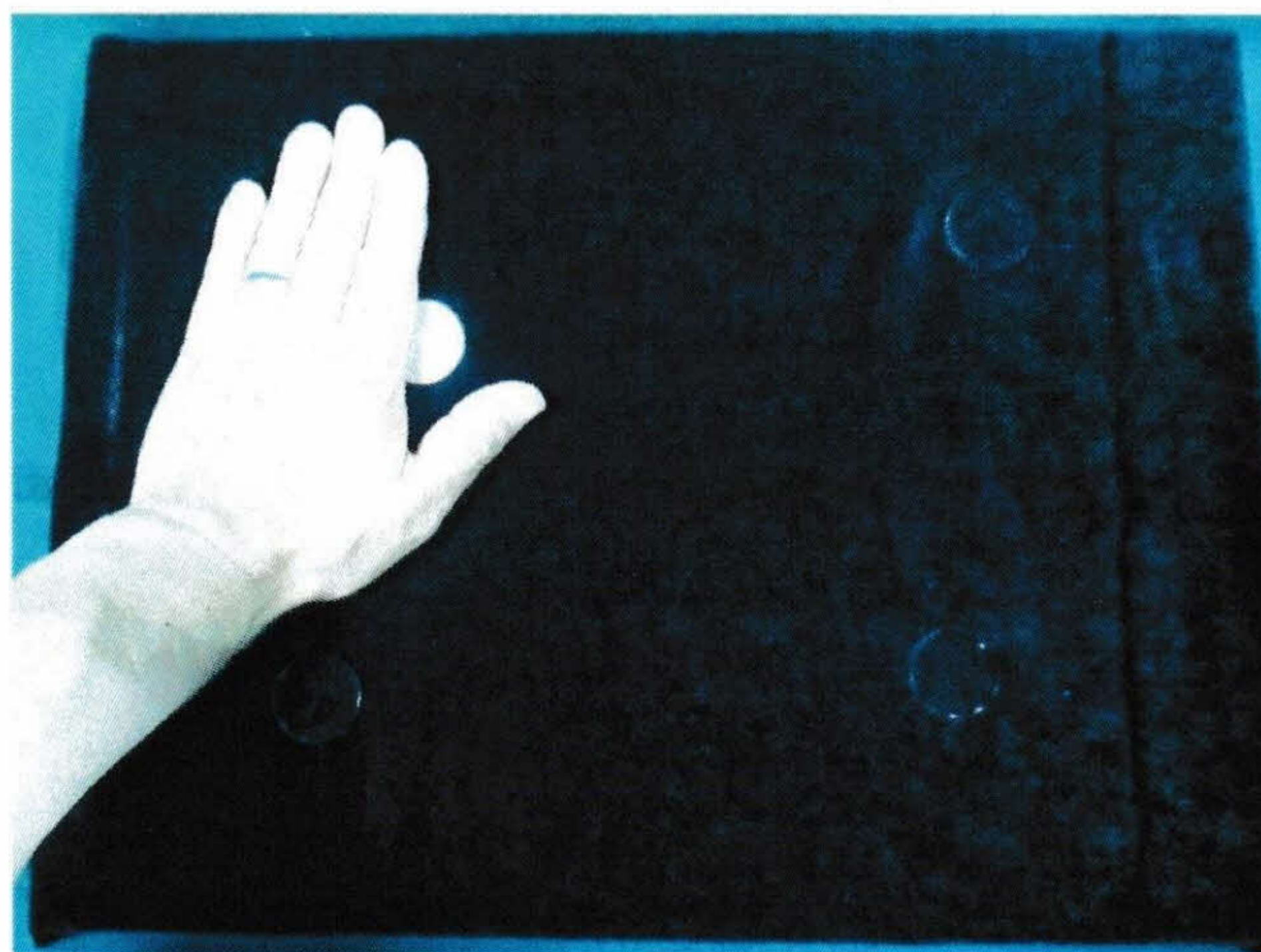


写真153

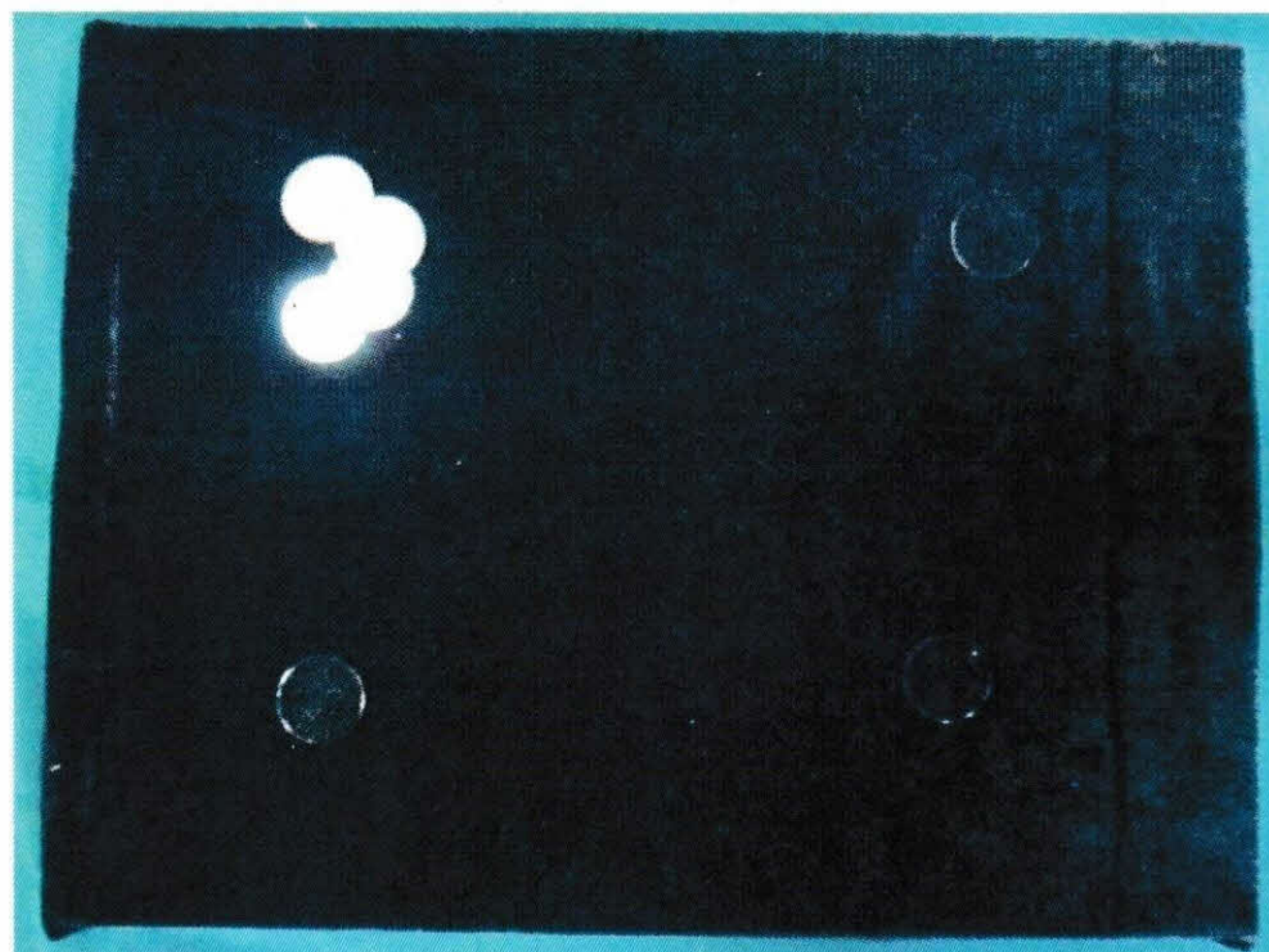


写真154

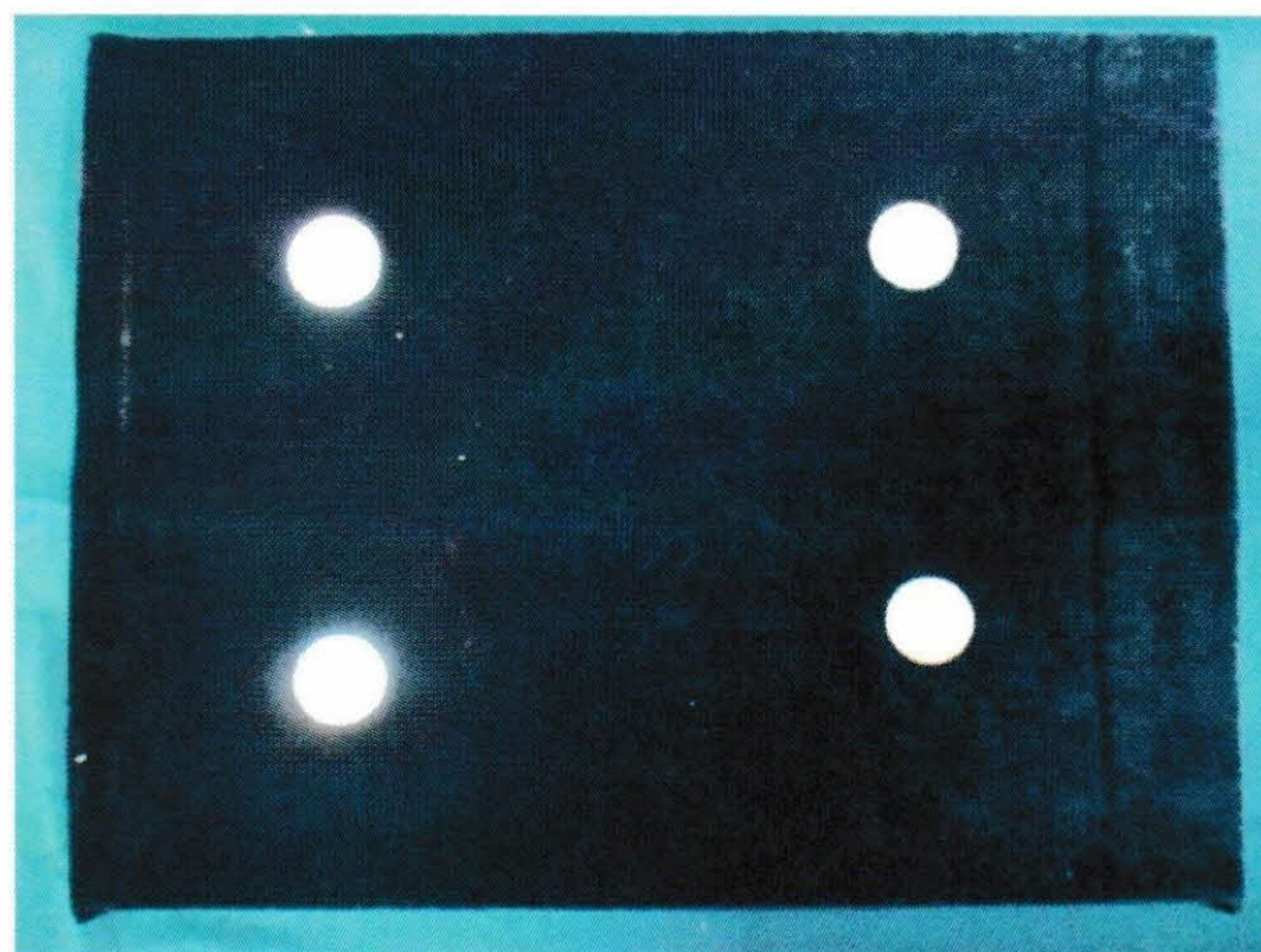


写真155

⑪コインをひっくり返さなければいけない、という思いがあると、どうしても気が焦りますが、後半部

分は、ブラック・アートで観客からはコインは見えませんから、手の下からゆっくり出現してもいいのです。見ている観客は、左上隅の4枚が1枚になったことに目を奪われますから、意外にひっくり返す時間はあるのです。

[コメント]

ブラック・アートの本来の考え方からすれば、今回のようにコインの裏面を黒くするのではなくて、コインに黒いカバーをかけるのが王道です。その場合は、フラップが必要で、手の下でコインにフラップをかけてカバーすることになります。後半部分では、フラップを一斉に開けてコインを出現させる現象がありますが、その場合にはスレッドが必要です。現象としては、コインが消失するのも出現するのもずっと鮮やかになります。工作も、そんなに難しくはないのでやってみる価値はあると思います。ただし、コインが消えるときのハンドリングはひとつずつなのでそんなに違和感なくできますが、出現するときはスレッドを3本一度に引かなければなりませんので、1本にまとめるにしてもどちらの手でどのように引くのか、あるいはリールで引っ張るのかは、悩ましい課題です。

黒いスポンジボール

麦谷眞里

(はじめに)ブラック・アートを特集したからではありませんが、黒い色のスポンジボールについて考えてみたいと思います。私の記憶が正しければ、初めて奇術界に登場したスポンジボールは淡いグリーンのような色で、けっこう硬いものでした。その後、アルバート・ゴッシュマンが現れてからは、赤いスポンジボールが標準となり、かなり柔らかい素材のものが出回るようになりました。それでも、黄色、オレンジ、紫、緑などは続々と市場に出てきましたが黒のスポンジボールは見かけませんでした。ところが近年は黒い色のスポンジボールを見かけます(写真156)。



写真156

私の関心は、この黒のスポンジボールには何か特別な用途があるのだろうか？ということです。

結論から言うと、比喩的な演出を設けない限り黒いスポンジボールの必然性はありません。たとえば、石炭とか鉄砲や大砲の玉とか、そんなストーリーで演じる場合なら黒のスポンジボールは有用だと思います。しかし、そもそも、世の中のマジシャンで黒のスポンジボールを使っている人が少ないです。それなのにディーラーでスポンジボールを買うとき必ず黒の選択肢があるのも不思議です。そこで、たまには赤でなくて黒のスポンジボールで手順を組んでみようと思いました。

[現象]

トランプの間から出現した黒いスポンジボールが次々変化していろいろな形になり、最後は客が想像したものの形になります。

[必要なもの](写真157)

- ①直径5cm程度の黒いスポンジボール 3個
- ②直径1cm程度の小さな黒いスポンジボール 15個以上
- ③黒のスポンジのウサギ 2羽（ウサギでなくてもかまいません）
- ④黒の ding dong（中サイズ） 1個
- ⑤小さめのハンク・ボール 1個
- ⑥大きめのハンク・ボール 1個
- ⑦デッキ 1組



写真157

[準備]

- ①黒い大きなスポンジボールは、2個を上着の左ポケットに、1個を上着の右ポケットに入れておきます。
- ②小さな黒のスポンジボール15個（以上）は、小さいほうのハンク・ボールに押しこんで、上着の左ポケットに入れておきます。
- ③2羽のウサギのスポンジは、大きなハンク・ボールに押しこんで上着の右ポケットに入れて置きます。
- ④黒の ding dong は、長茎を折り畳んで小さくして、上着の右ポケットに入れておきます。

⑤デッキは箱に入れたままで上着の左ポケットに入れておきます。

以上が準備ですが、上着の右ポケットには、最初、黒のボールと ding dong が一緒に入っていますので、スポンジの手触りで間違えないように、ボールのほうは、もし、チェンジ・ポケットのような小さな内ポケットがある上着なら、そこの中に入れておきます。なければ ding dong の上に載せておきます。

[やり方]

- ①できれば、最後に ding dong のクライマックスがありますので、女性の客で、そういうギャグに恥ずかしがったり怒ったりしない人を選びます。若い女性であっても、たいていの場合は、笑ってくれるので、客の選択にそれほど神経質になる必要はありません。ただし、未成年はダメです。
- ②上着の左ポケットからカード・ケースを取り出し、フラップを開けてデッキを取り出して、「ジョーカーは要りませんので」と言いながら、ジョーカーを箱の中に戻します。この一連の作業を通して、マジシャンの両手には何もなかったことが観客にわかります。箱はフラップを閉めて上着の左ポケットに入れますが、同時にデッキは右手で客に渡して、シャッフルしてくれるように頼みます。この間に左手はカード・ケースを上着の左ポケットに置いて、代わりに黒いスポンジボールをフィンガー・パームして来ます。
- ③客からデッキを受け取り、ただちに裏向きで左手に渡して両手の間にファンに拡げます。デッキの下には黒いスポンジボールがありますが、客からは見えません(写真158)。



写真158

- ④拡げたカードの中から客に任意の一枚に触ってもらいます。客が触ったら、「このカードですか？」と念を押してから、このカードを含めて上のカード群をすべて右手で取って全体を表向きにします。黒いスポンジボールは左手のカード群の下にあります(写真159)。
- ⑤右手に表向きになったカード群の一番上のカードの名前を言いつつ、このカードだけを表向きのまま左手のカード群の上に一旦取って左親指で押さえ、直ちに右手のカード群を裏向きに戻して、この下に表向きのままやや左に突きだした形で加えます。そして、この動きの中で、黒いスポンジボールを左手のカード群の下から右手のカード群の下に移動させます(写真160)。

- ⑥「もう一枚必要です」と言って、左手に残ったカード群の一番上のカードを右側へ押し出して、裏向きのまま右手のカード群の下に取ります(写真161)。



写真159

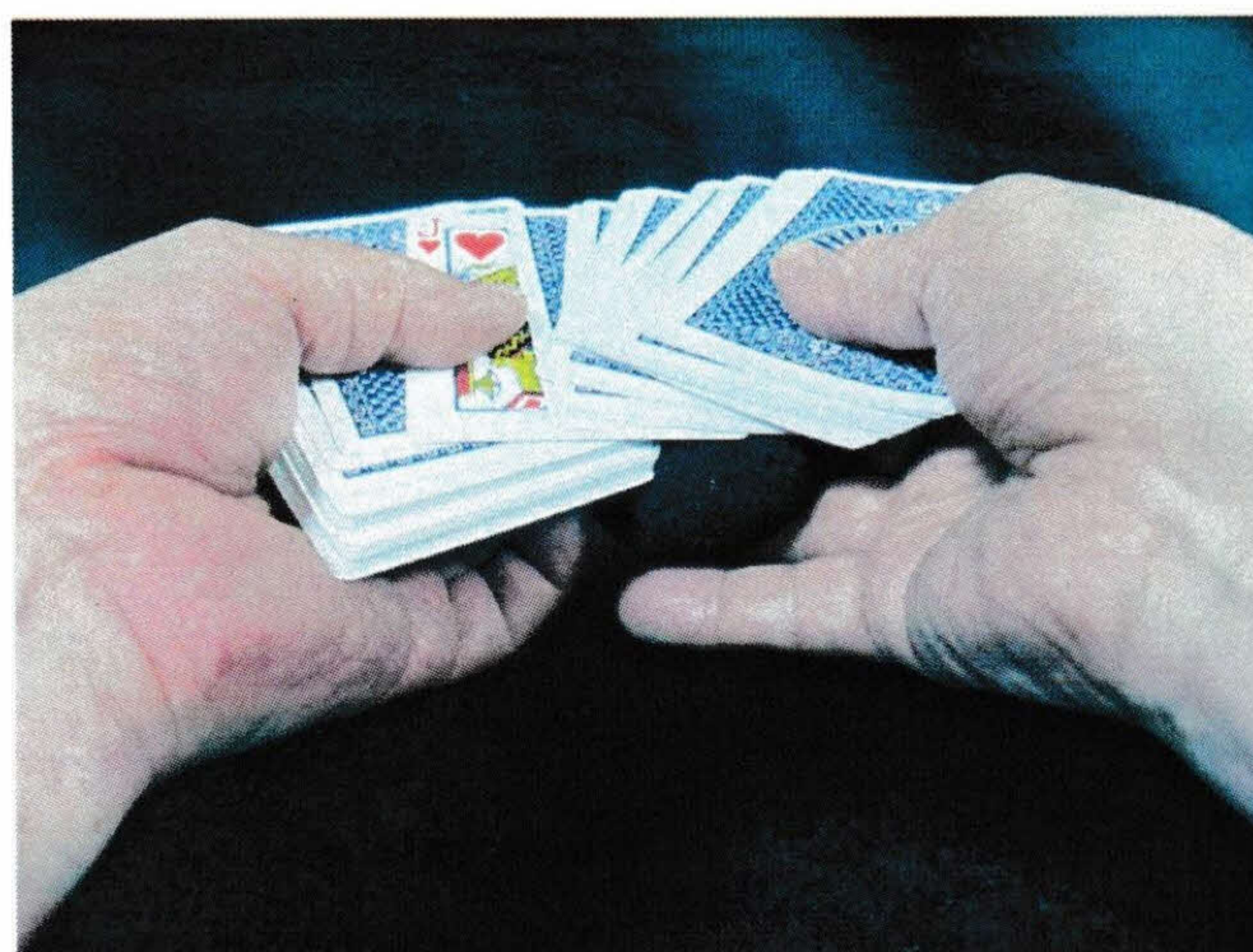


写真160

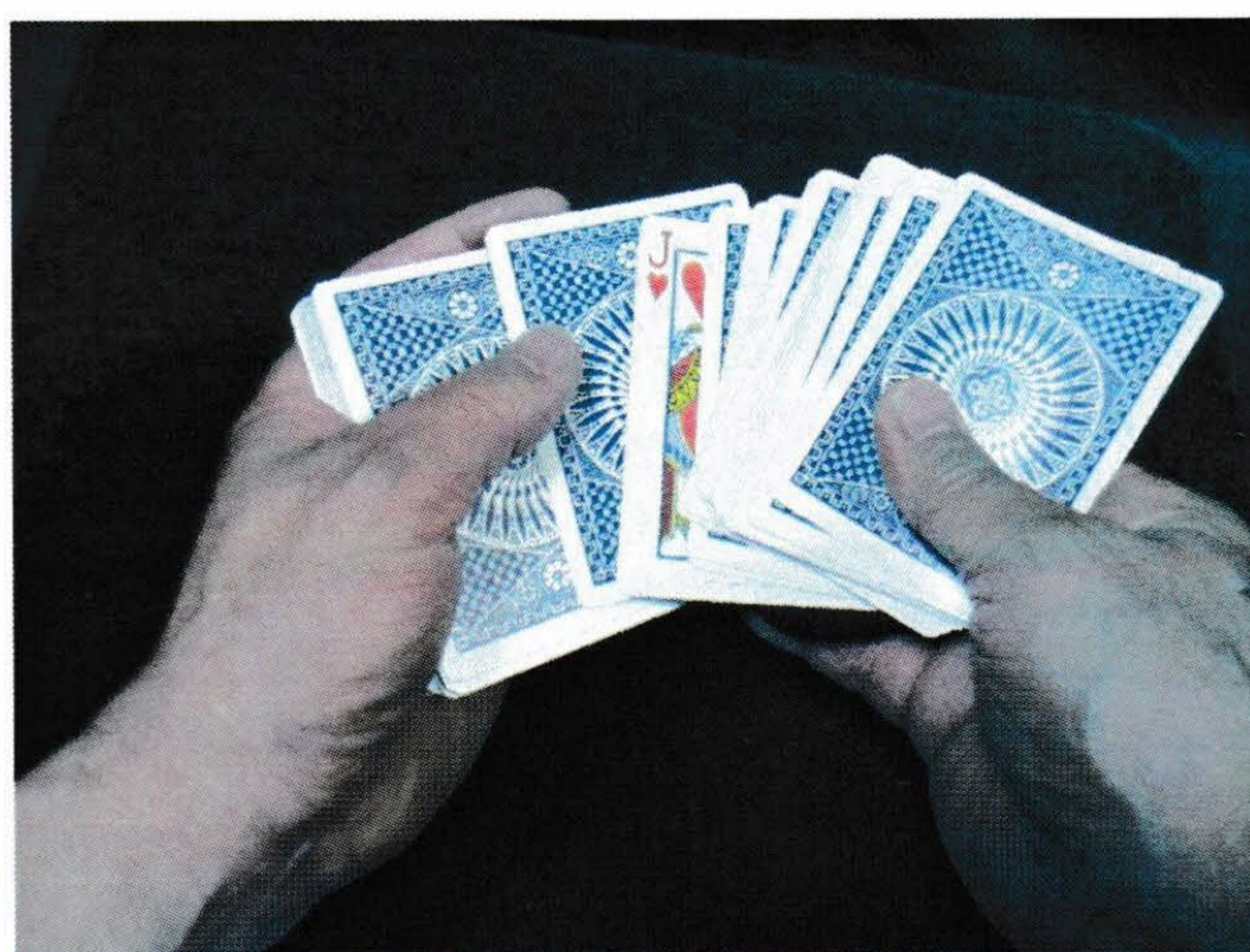


写真161

- ⑦表向きになったカードとその下のカードだけを残し、デッキは脇へ除けます。この2枚のカードの

下には黒いスポンジボールが隠れています。2枚のカードを左手に持って、右手で右側のカードを裏向きにします。この裏向きのカードの下に黒いスポンジボールを隠し持って2枚のカードを重ねます。すると中が膨らみますから、あれ？なんだろう？というふうにして黒いスポンジボールを出現させます(写真162)。

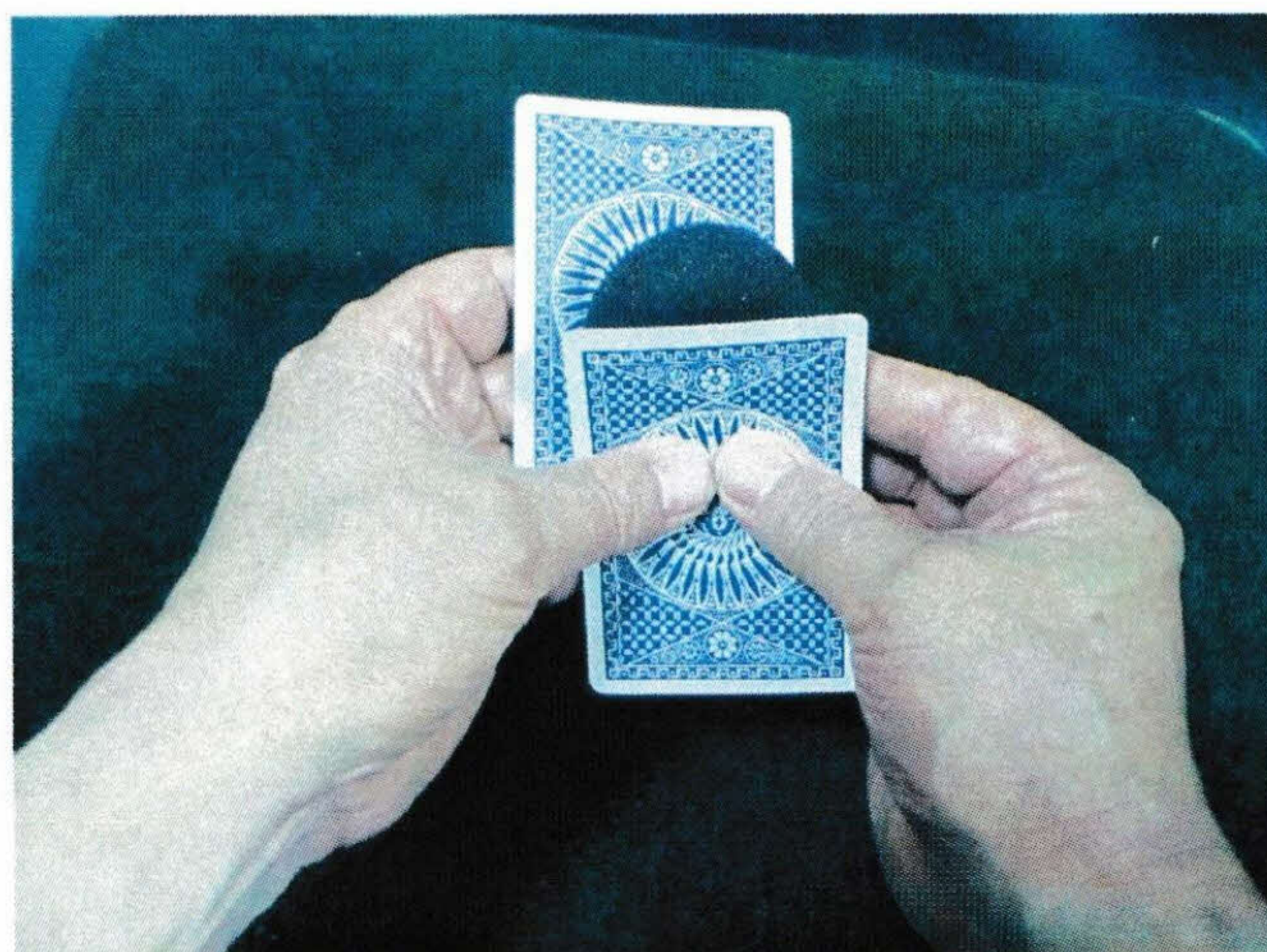


写真162

- ⑧黒いスポンジボールはテーブルに置いて、デッキを箱にしまいます。「ボールが1個だけでは面白くないので、もう1個加えます」と言って、まず右手を上着の右ポケットに入れます。続いてデッキを左手で上着の左ポケットにしまいます。右手は、ポケットにあった黒いスポンジボールを指先で見えるように取りだして来ます。一方、左手は、デッキを置いた手で黒いスポンジボールを軽くフィンガー・パームして出して来ます。
- ⑨右手のスポンジボールをすでにテーブルの上に出してあるボールの横に置きます。「どちらか好きなほうを指差してください」と客に言いながら、左右の手で1個ずつ取り上げます。ただし、左手はすでにフィンガー・パームしているボールと一緒にします。スポンジボールは潰れますから客からは2個持っているようには見えません。客がどちらを選んでもマジシャンズ・チョイスによって左手の2個のボールを客の手に握らせます。右手のボールをリテンション・パスなどで左手に握ったように見せ、「このボールはポケットにしまいます」と言って、左手を上着の左ポケットに入れ、小さなハンク・ボールをパームして来ます。客に手の中に何個持っているか訊いてから開かせると、ボールは2個になっています。客は驚きます。転がる2個を左右の手で1個ずつ拾って、右手はすでにパームしているボールを加えます。
- ⑩「もう1回やってみましょう。今度は2個とも握ってください」客に3個のボールを一緒に握らせます。この間に、両手を近づけ、右手の中指と薬指とで左手のハンク・ボールを挟んで、指を曲げて右手にパームします(写真163)。
- ⑪空いた左手を何気なく空であることを見せながら、「今度は何個になっていると思いますか？」と客に訊ねます。客の答えがなんであろうとも、「そうですか？確かめてみましょう」と言って、手を開かせて3個であることを見せます。客が驚いている間に、再び、右中指と薬指でハンク・ボールを挟んで進展させ、左手に移します。

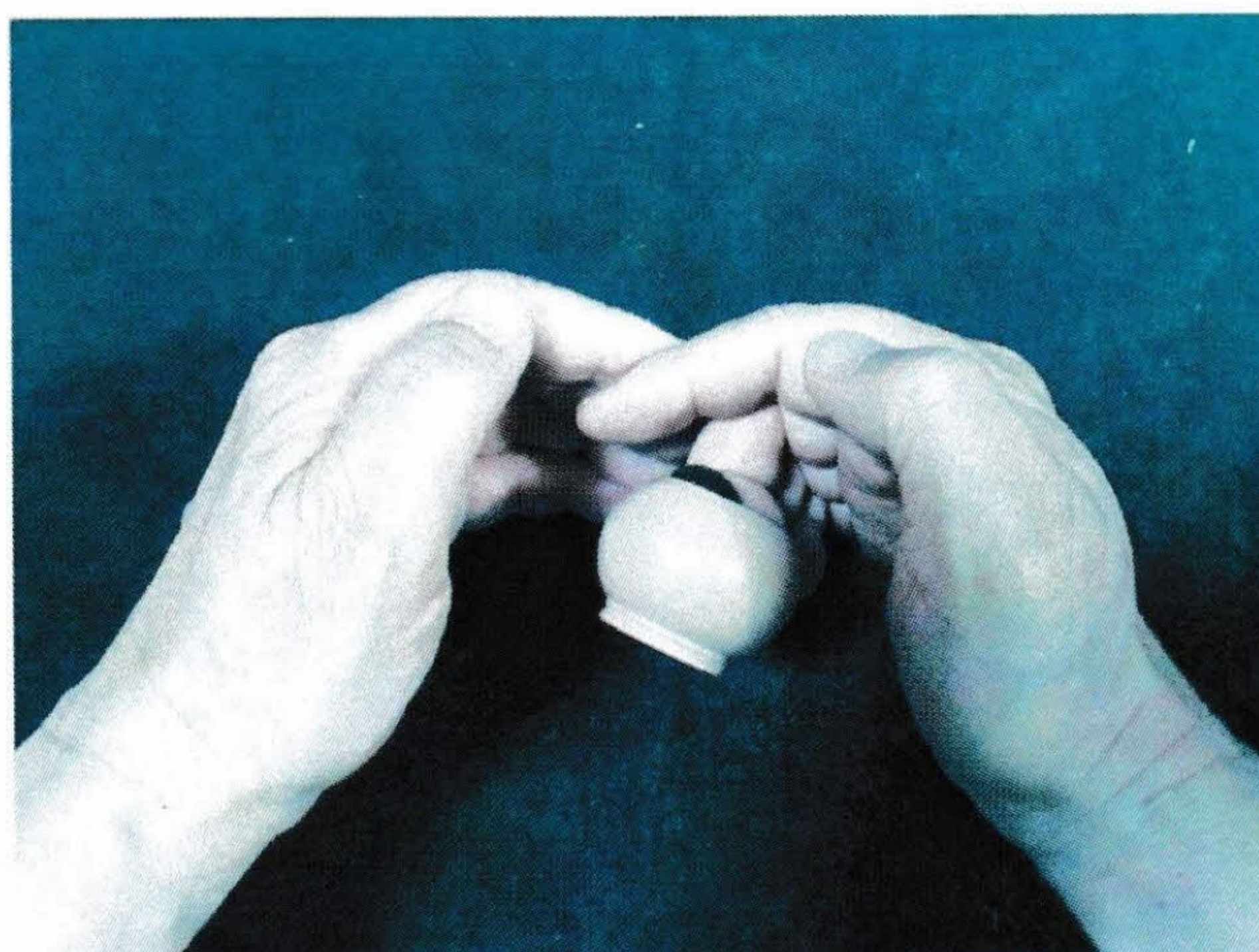


写真163

- ⑫「今度は、この3個を私が握ります」と言いながら、左手の拳の中にテーブル上の3個の黒いスポンジボールを押しこみます。客に、「私の手の中に何個あると思いますか？」と訊ねます。客の答えによらず、右手の指をハンク・ボールの中に入れて、小さなボールを1個、2個出します。「たくさんあるのです」と言って、次々と、7個ぐらい出したら、さきほど同じように右手の中指と薬指とでハンク・ボールを挟んで右手の中にパームします。ただちに左手を一旦開いて、3個の大きなボールを出します。「もちろん、これらもあります」
- ⑬この間に、ひそかにハンク・ボールも左手に戻します。「まだあると思いますか？」と言いながら、ハンク・ボールの中の残りの小さなボールを1個ずつ右手の指先でテーブル上に出します。
- ⑭一呼吸おいて、テーブル上の小さなボールを両手で集めて、上着の左ポケットに入れますが、このとき、ハンク・ボールも一緒に左ポケットに入れてしまいます。同時に、右手も小さなボールを集めた風を装い、上着の右ポケットに入れて、大きなハンク・ボールをパームして来ます。
- ⑮両手で、テーブル上の大きな3個の黒いボールを左右ひとつずつ取り上げますが、まず、空の左手で、次いで大きなハンク・ボールをパームしている右手の順ですが、右手はハンク・ボールをパームしたまま、親指と人差し指とでテーブル上のボールを取り上げます(写真164)。

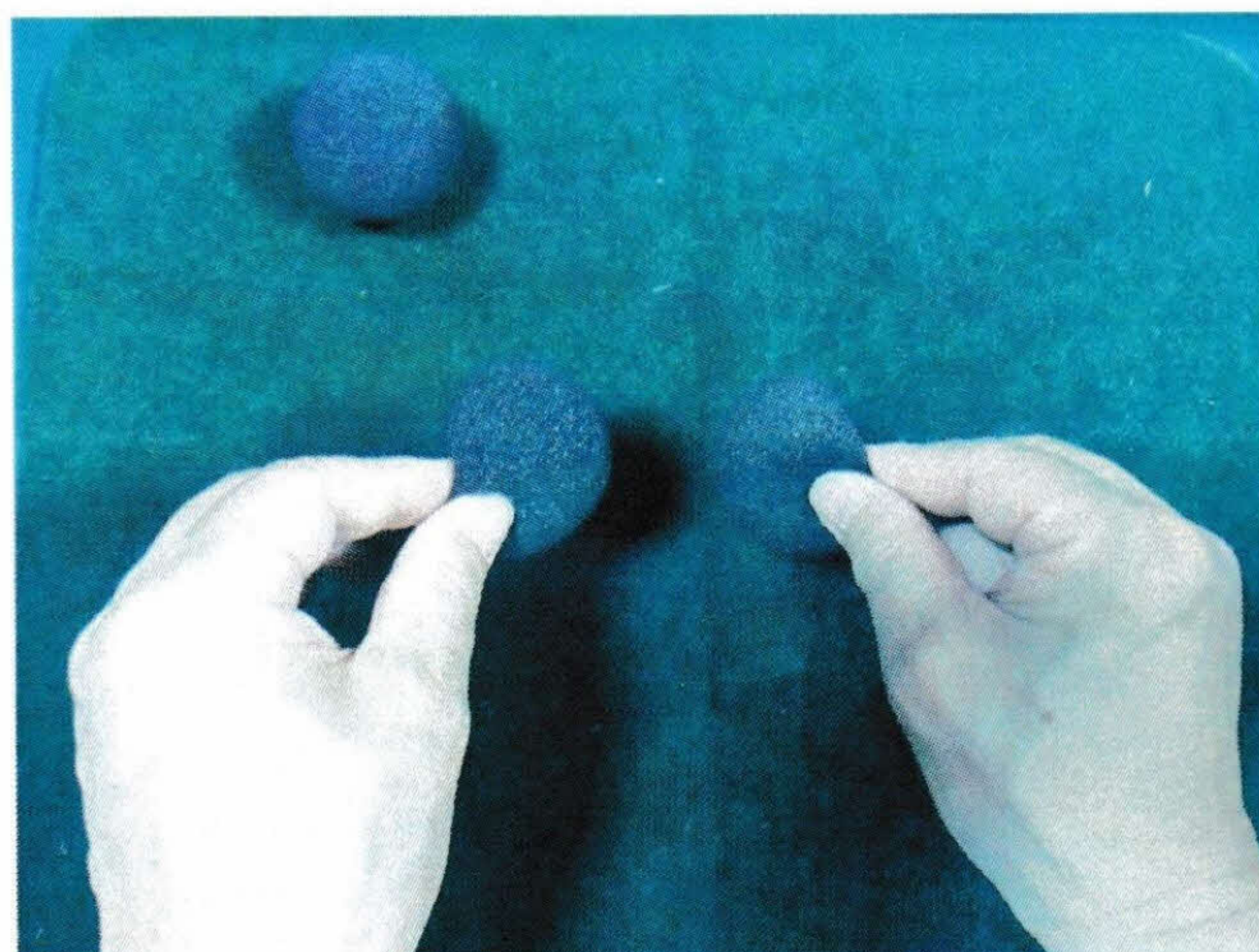


写真164

- ⑩左手はボールを持ったまま、何げなく空であることを見せたら、両手を合わせながら、右中指と薬指とでハンク・ボールを挟んで左手に移し、右手も何げなく空であることを見せながら残りのボールをテーブルから取り上げます。続いて、右手で左手のボールを取って指先に3個のボールを持ち、左手は拳に握ります。客に、右手の3個のボールを示し、「この3個のボールを動物の形に変えようと思いますが、どんな動物がいいですか？」と訊ねます。ボールは左拳の中のハンク・ボールの外側に入れます。客がウサギと言ったら奇跡が起こりますが、何と答えようとも、「そうですか、ご覧ください」と言って、右手の指先で、左手のハンク・ボールから2羽のウサギを1羽ずつ出します(写真165)。この動きの中で、できれば3つの大きなボールは左親指を使ってハンク・ボールの中に押し込んでしまいます。できなければそのままかまいません。

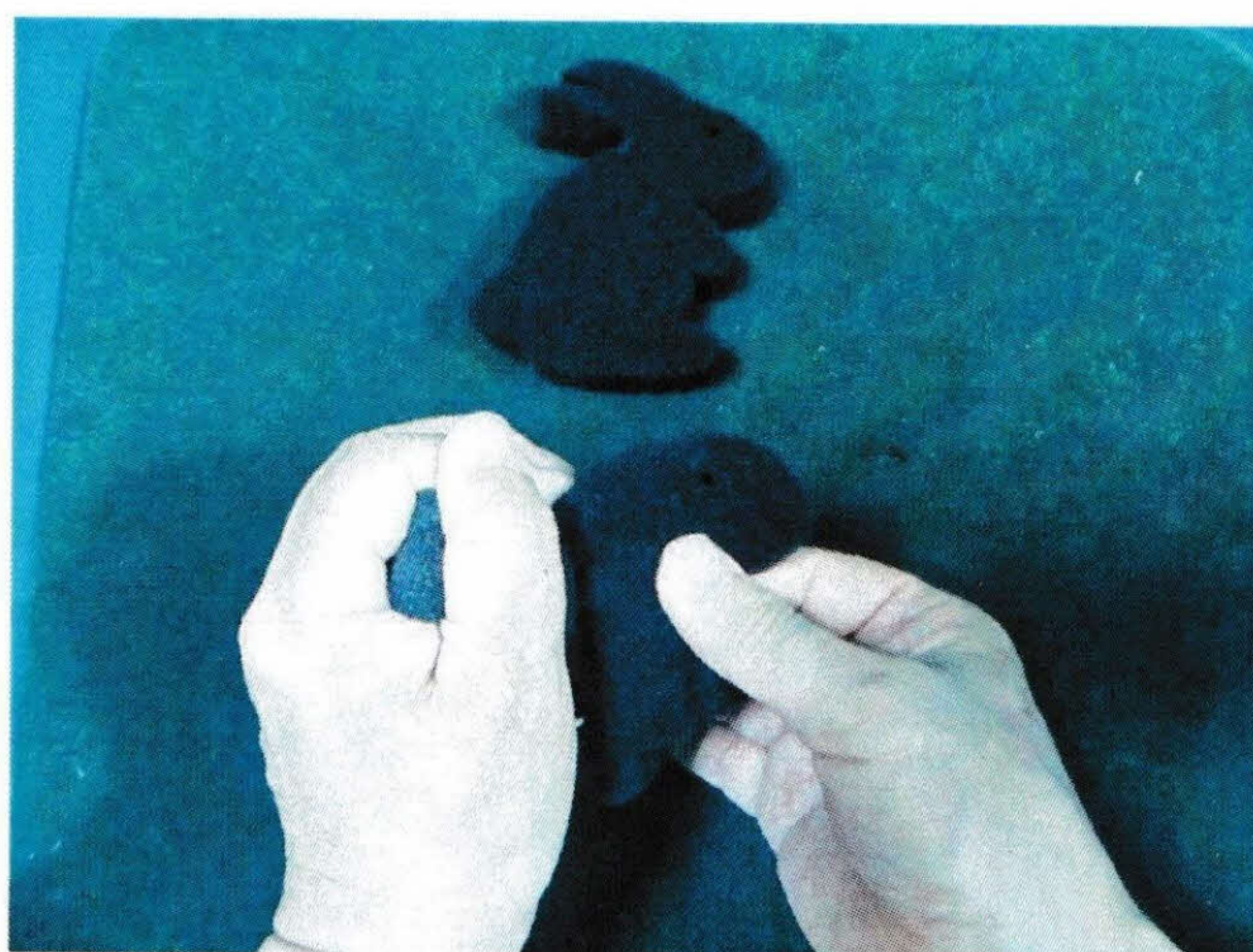


写真165

- ⑪左右の手でそれぞれのウサギを掴んで左右のポケットに入れます。左手はスポンジボールもハンク・ボールも上着の左ポケットに置いて来ますが、ウサギだけは思い直したようにもう一度出して来ます。右手は、右ポケットの中でウサギを放して、準備してあった ding dong をできるだけ小さくパームして出して来ます。左手に持っているウサギを客の目の前で片手だけで折り畳みながら小さくして、右手に渡したように見せます。渡した瞬間に左手のウサギをパームして右手の ding dong の黒い部分を見せれば、左手の黒いウサギを右手に渡したように見えます。
- ⑫「この黒いウサギはさきほど私の手の中で黒いボールから変化したのですが、今度は、あなたの手の中で別の動物に変えてみましょう」と言って、右手の ding dong を客(女性)の手に握らせます。ウサギは左手に小さくパームしたままです。「それでは、あなたのもっとも好きな動物を思い浮かべてください。大好きな彼氏でもいいですよ」と言います。客の反応を待って、手をゆっくりと開いてもらいます。出た瞬間はテーブルの上に落ちたりして形状が何かわかりませんので、これを左手で取り上げて、まっすぐにして、客に示します(写真166)。
- ⑬「人間も動物ですから彼氏でもいいと言ったのですが、本当に彼氏を思い浮かべたのですね。けっこうです」と言って結びます。客がどんな感想を述べようとも、あたかも客が小さな声で何か言っているのだが聞こえない様子で客に耳を傾けて、「え？なんですか？あー、彼のは、こんなに小さくない！それは失礼いたしました」と言って終わります。

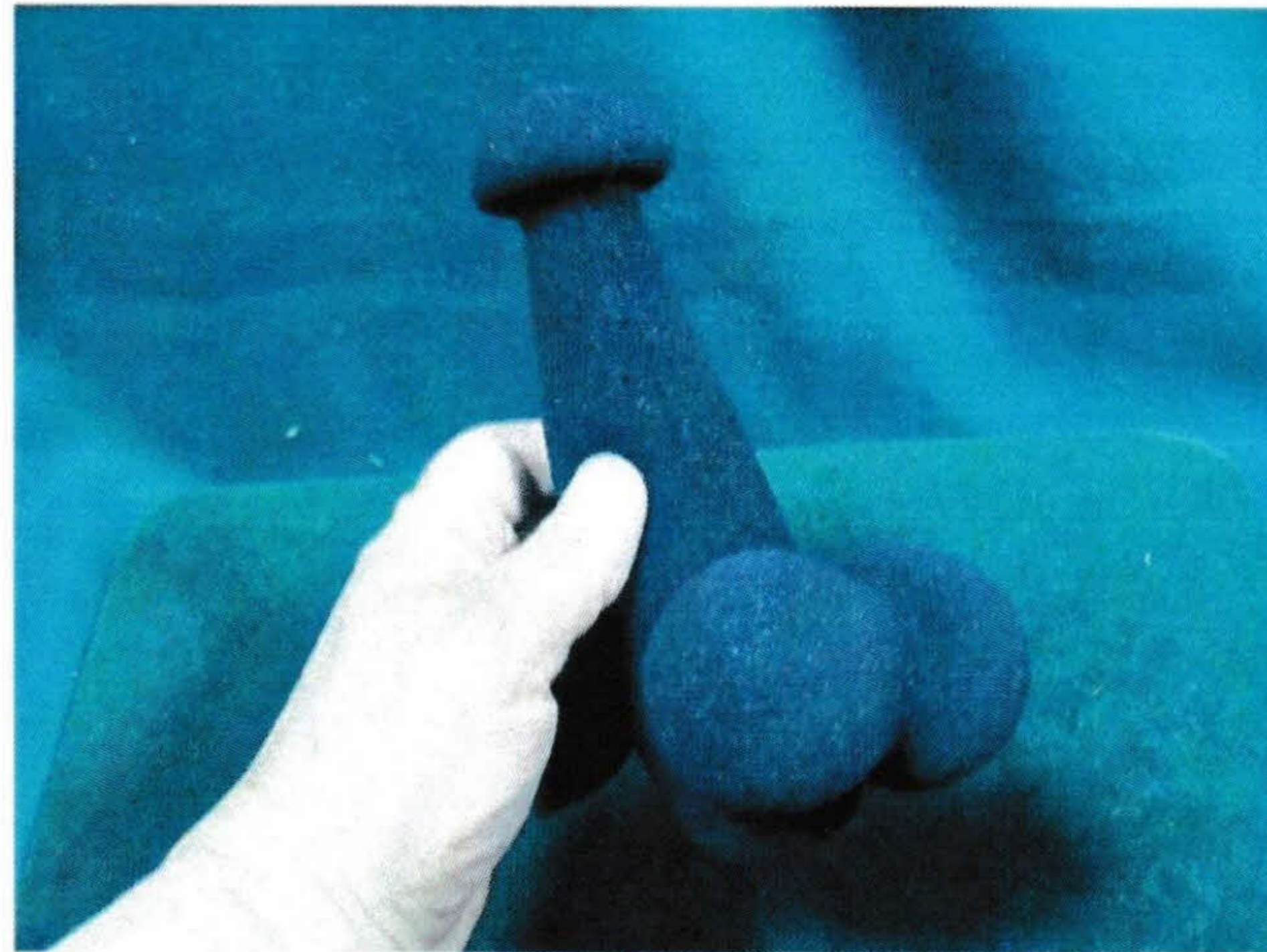


写真166

[コメント]

黒いウサギや ding dong は言うまでもなく必須ではありません。演じるマジシャンの特性に合わせて別のものに替えていただいてけっこうです。赤ならば、国内の奇術材料店でも、ボールはもちろんのこと、ウサギも ding dong も手に入ります。しかしながら、今回のポイントは、赤いスポンジボールを十年一日のごとくガマクチの金具から出して、消したり増えたりする現象ばかりではないということと、ひとつの手順として演じる試みを提案したことです。敢えて黒いスポンジボールを使っていることに味わいを見いだしてください。

また、ハンク・ボールを使って、クライマックス用のスポンジを隠したまま両手を空に見せる動作は有用だと思われます。私は単純に「ハンク・ボール」と書きましたが、どこで購入した用具かはまったく覚えてなくて、ひょっとしたら、どこかの奇術大会のディーラー・ブースで買った藤原邦恭さんの商品だったかもしれません。

ポケットの中の ding dong を小さくまとめておくために小振りのダブル・クリップを使うと便利ですが、ダブル・クリップそのものをポケット内に固定する必要があるので今回はやめにしました。また、ポケットではなく、上着の裏側にダブル・クリップで下げておく方法もあります。ハンドリングに影響を与えるので、これも今回は使いませんでした。手順が進むにつれて上着の左ポケットに物が増え、右ポケットが空になって行きます。これは、最後に、右ポケットに残る ding dong を取り出しやすくするためです。

最近、このようなエンターテインメントでもセクシャル・ハラスメントだと主張する人がいるかもしれません。ハラスメントは、対象になった女性客が平気でも、この手品を観た他の客が不快に感じたら成立します。観客と雰囲気を選ぶことが肝要です。

これは、masquerade part 8 の No.5 です。

e-mail のアドレス: masqpart4@aol.com

郵便の送付先: 〒145-0061 東京都大田区石川町2-33-1-904 マスカレイド

(2020年6月)